

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和六年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第三十二卷 第十二号（通卷二六四号）

万象

B A N S Y O

三
月
号

2024. 3



三月の句

町裏の知る人ぞ知る桜かな

飛 高 隆 夫

「万象」誌（平成25年7月）掲載の作品である。
愛犬を連れての散歩は、俳句の材料探しのように
あり、発見の喜びであつたのでは、と思う。

以前、靖國神社や浦和の調神社つきでの吟行にこ
緒した折、木の下で句帳を開いていらした先生に、
句作りについて伺つたことがある。ちよつと考えて、
「僕は吟行は得意じゃないからね。いつも、同じ場
所で同じ物を見るんだよ」と、静かに、仰いました。
「とにかく、作ってみる事」「迷わない事」「写生を
続ける事」とも……。先生の教えを心掛け積み重
ねてゆきたいと思います。

（岡村純子）

令和六年

三月号

万象

BANSYO

花の色は

うつりにけりな

いたづらに

わが身世にふる

ながめせしまに

(小野小町)

万 象

令和6年3月号

名誉主宰作品 薄 氷 内海 良太 4

主宰作品 スニーカー 江見 悦子 5

風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満

松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子

榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩^{②①} (三月号) 小林 愛子 10

万象の窓^{②④} 「万象賞」に応募を 江見 悦子 11

同人作品

江見悦子選 12

同人会だより

「万象」オンライン同人句会の参加者募集 沢辺たけし 32

1月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

珈琲ぶれいく^{④⑥} 33

同人作品の佳句 江見 悦子 34

同人特別作品

肥前十一月 田中 道江 36

平和観音 島田 和枝 37

特別作品評 (一月号) 岩崎 武士 38

同人作品鑑賞 (一月号) 中本 清 39



江見悦子自選句鑑賞⑥ うたた寝のまぶたの痒し蝶の昼 前田貴美子 40

潜き鵜の水輪を春の鴨すべる 喜多尾明子 40

『砂時計』鑑賞 俳誌『森』（令和5年10月号より転載） 41

続・風のしをり③ 子規俳句の魅力―初期の作品から（三） 沢木欣一 編集部 42

万葉の抒情⑪ 『万葉集』にたずねる抒情の源流⑪ 橋本 清 43

万象ノオト「鍵」 草間三香子・石川 幸子・星野 信子 44
池田やすし・長谷川 秀子・中川 雅月

万象作品

江見悦子・内海良太 共選 47

会費納入のお願い 松浦 陵保 57

万象作品の佳句 内海 良太 58

新中央句会報（12月例会） 60

北から南から 布施弁天とあけぼの山農業公園（千葉） 穂苅 照子 64

ルビーの小函（三月号） 編集部・校正担当 65

東西南北 66

薄 氷

内海良太

(名譽主宰)

薄氷の浮びし馬の水飲み場
荒涼とわが机あり年の暮
冬あたたか四ツ谷の土手の松の幹
来る筈の一人遅れてどこか火事
詰め合うて屋台膨るる菓喰
ピアノ鳴る侘助垣の離れより
白鳥二羽舟のごとくに進みけり

スニーカー

江見悦子

(主宰)

人日の電車に並ぶスニーカー
大軸は福の一字よ野水仙
寄鍋の豆腐ふくるる山の雨
走り湯の岩屋に蒸され年暮るる
人逝くや尾羽震はせる冬の鷺
オリオン悼 檜山哲彦さんの天の深きへ逝きたまふ
底冷えの能登へ電話のつながらず

冬の虹

小林 愛子

(名誉顧問)

冬の蝶土手の日向を拾ひつつ
薄ら日に枯れゆく齒朶のしどけなく
シャンプーの頭預けて年の暮
吟詠の仔細さておき花びら餅
百歳の年輪かくも冬銀河
母恋ひの百寿のわたる冬の虹
冬すみれ濃ければ踵^{きびす}返しけり

三澤治子さん百歳の大往生 二句

女神の島

中村千久
(編集人)

空つ風

柳澤宗正
(顧問)

冷まじや鏃の残る頭蓋骨

宗像大社
三句

沖はるか女神の島に初霞

結界の石の清しき淑気かな

手水舎の笕たばしる春の水

鴻臚館跡

薬ゆる基壇に古りし柱跡

筑前に遅き朝日や蓮の骨

初 鴉 福島せいぎ
(顧問)

竜 天 に 曾根 満
(同人会会長)

七福の年のはじめのえびす舞ふ

唐の代の泥の硯の筆始

齒固や女体のごときうつば噛む

赤き実を唾へてゐたり初鴉

掃除機のリンバが走る寝正月

初夢のモノクロの街歩きけり

新春や琴の音わたる港町

初電車一駅ながら乗りにけり

悼 三澤治子様

寒の入白寿の師友逝き給ふ

語り合ふ余命いくばく根深汁

大山の嶺に初雪結露拭く

床屋より襟立て向ふ空つ風

雪解月水車の放つ飛沫かな

啓蟄や極彩色の透彫

春蘭の谷や分け合ふめんば飯

露座仏や前も後ろも杉の花

竜天に登りし沼の風温き

囀や木出しの道の分岐点

篝火草

松原智津子

(北海道)

メモ懐し捨つるに惜しき古曆
松籟の道を急ぎて初詣
初春や巫女舞の鈴清清し
何げなく賀状に混る喪の葉書
咲き満ちて焰の盛り篝火草

冬の川

亀田やす子

(栃木)

除夜の鐘打つて貰ひし駄菓子かな
初詣猫を抱きくる女の子
納札分別箱に溢れけり
納豆の糸長長と四日かな
丈低きクレソンを摘む冬の川

蓮の骨

沢辺たけし

(千葉)

一人二人三人五人焚火の輪
銀の枝張る桜冬芽かな
青空に雪虫追うて眼の乾く
夕暮やばうばうと立つ蓮の骨
凧に月輪蒼く山尖る

四日の松

吉中愛子

(東京)

ふくふくと風を包みて枯尾花
棺へ降る四日の松の日の光
悼 杢山哲彦様 二句
赤シャツの歌ひ終へたり寒つばき
真夜中の空の青さや年送る
小太鼓の桴の軽さや冬の蝶

白鳥 榎本文代

(神奈川)

十二月花屋は鸚哥を肩にのせ
土鍋より湯気のゆたかに蟹雑炊
ほつほつと辛夷の冬芽あかね空
白鳥の夕日を羽にたたみけり
悼 三澤治子様
オリオンのひときは高くきらめける

日向ぼこ 神田美穂子

(静岡)

噛みあはぬ会話弾めり日向ぼこ
にほどりの貌出すまでの黙長し
ガラス窓磨くや冬日鮮しく
酔海鼠や父の独酌きりもなや
御降りの音ともならぬままに更け

初日浴ぶ 井村和子

(石川)

お薬師の丹塗りの橋や厄詣
吾が干支の兎を送り初日浴ぶ
加賀や能登大地震振りしお元日
推敲の重きペン先影冴ゆる
那智黒の硯彫りゐるちゃんちゃんこ

俳句てふ光 前田貴美子

(沖縄)

落し物サンタの髭と猫の鈴
街裏に聖夜灯せりランプ売
冴ゆる灯や喪服のままの茶漬飯
俳句てふ光昇らむ小晦日
悼 檜山哲彦さん
お降りの闇に心の置き処

風音散歩

② (三月号)

小林愛子

札納分別箱に溢れけり 亀田やす子

年末に神社や寺から新しいお札を受け、今年の古いお札を納札所などに収める。収めた札はまとめて焼き清められる。

掲句に「分別箱」とあるが、札を大小に振り分けているのであろう。そこに溢れていたというのは、科学万能の時代になっても神仏に恃む心に変わりなく大勢の人が訪れた、ということだ。まして疫病流行に振り回された後のこと、清々しく出直したいのであろう。「溢れけり」の発見で、引きも切らず人の訪れる姿も見える。

青空に雪虫追うて眼の乾く 沢辺たけし

掲句の「雪虫」は「綿虫・大綿・雪螢・雪婆」ともいいアリマキ（アブラムシ）科の昆虫で、晩秋から初冬にかけて青白く光りながら浮遊する。しかし北国ではユスリカの類の雪虫（春）、羽のない跳虫（冬）を雪虫とも呼ぶ。句は前者。

雪虫をその年に初めて見たとき、胸の奥がどきりとするがあれはいったい何だろう。作者は青空にふわふわと浮く心許なげな白い綿埃のような小虫に心奪われている。「眼の乾く」は、青空に小虫を追った疲れであり、また本格的な冬の前の穏やかで乾いた空気の連想から、季節感をも伝えている。

酔海鼠や父の独酌きりもなや 神田美穂子

海鼠は日本各地に産すると歳時記にあるが、最近あまり見懸けない気がする。体は褐色、赤、黒、白、緑などがある。

海鼠はよく酔海鼠にして食べる。掲句の、「父の独酌」に明治から昭和にかけての父親の姿が彷彿とよみがえる。よく働き、口数が少なく、しかしいざというとき頼り甲斐のある存在。きりもなしに独り酌む父親の背中には哀歓がにじみ、箸の先の得体の知れない酔海鼠が面白おかしい。

落し物サンタの髭と猫の鈴 前田貴美子

掲句のポイントは動詞、形容詞が無いことで、従って物に即した言葉と言葉の距離が離れていて、その間を様々な空想を巡らすことが出来る。今日は楽しいクリスマスパーティー、ひと騒ぎの後気付いたら、活躍したサンタの髭と家猫の鈴が見当たらないではないか、はてさて。サンタの髭と猫の鈴との意外性が楽しく、ウィットに富んだ句である。

松籟の道を急ぎて初詣 松原智津子

初詣は、元日に氏神、あるいは社寺に詣でることであるがその形態は様々である。恵方に当たる社寺に限らず、平素信仰しているとか、ご利益によつて選ぶことも多い。

掲句は「松籟の道」を急いだとあり、その足取りに迷いはない。松籟とは松に吹く風。またその音。「籟」は三つの穴のある笛の意。初詣への道程は申し分なかった。

「万象賞」に応募を

江 見 悦 子

今月号の裏表紙に、第二十二回「万象俳句賞」の要項を掲載しました。作品20句の応募案内です。1月末に締め切った、同人会主催の「中山純子記念俳句賞」は同人を対象とされていますが、こちらは会員、同人の別なく「万象」の誰でもがチャレンジ出来るコンクールです。以下、応募作品を読むときの私の留意点をお伝えします。大勢の方からの作品をお待ちしています。

未経験の方は、二十句という句数にたじろぎます。私が初心の頃言われたことは、4句を作り、それを5つ合わせて20句にすればいい、というもの。いささか乱暴な言い方に聞こえましたが、胸にすくと落ちたことを思い出します。

〈全体を通して〉・詩として、17音の韻文として、成立したものであること。

・「即物具象の写生」を基本とした句群であること。

・20句全体に一貫して流れるもの、主題となるものが欲しい。

・構成、組立てについて十分に推敲して欲しい。

・同じ季語を繰り返して使っていないか。季の進行に従う配列になっているか。

〈一句として〉

・説明的、報告的な句に終わっていないか。(固有名詞を使いすぎではないか)

・作者の身体感覚(実感)に裏打ちされた句になっているか。

・季語について 季語が活かされているか。季語の本意を踏まえているか。

・「切れ」について 句に欠かせないもの。切字は元より、常に意識して欲しい。

辞書、歳時記を活用するのは勿論のことです。

基本的なことを記しました。作品はあくまでも自分自身のものです。自分らしさを大切に、楽しんで句を作り、十分に推敲してコンクールに参加して下さい。期待しています。

同人作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

札幌 岡本 敬子

山際まで空ある街や十二月
鍊と靴すこし多めの鍊漬
漬け樽をいくつも並べ冬ともし
初冬のにはひ柴焼くにほひとも
地吹雪の中より赤き郵便車

札幌 林 陽子

新酒の香利くや杉玉くぐる時
凍つる森音消し匂ひ消しにけり
寒夕焼義母逝きし空櫺の空
ゆるゆると藻岩山またげり冬の虹
鮭のぼる抗ふ川の速さかな

札幌 落合 裕子

恙無くポプラのさやぎ聞く小春
一晚の雨が散らせり冬紅葉
篠竹を括りしのみ雪囲
コート脱ぐ演奏会の余韻もて
○初水白し夜明けの地の窪み

札幌 濱谷 和代

潮風や釣人深く冬帽子

薄雲を切り裂くほどの冬の雷
うつすらと森羅万象霜の朝
末枯るる平原分つ一輛車
薔薇窓や蜜蠟灯す降誕祭

札幌 大内 和 憲

レース果つ轡馬ねぎらふ息白し
一番に朝日捉ふる軒氷柱
診療の齒鏡一閃冬の雷
漆黒の牛舎を磨く寒の月
ボルシチの極まる赤に柚子一つ

札幌 紅 露 恵 子

石狩川の河口の青さ冬の鷺
夕鴉もう来ぬ木立冬ざる
胴裏は竜や童のちやんちやんこ
寒満月巨樹の枝ぶり男振り
○はじまりはワルツのやうに雪降り
極月の書棚の隅の星の砂

札幌 大内 マ キ 子

雪降り来仔馬の赤き耳袋
空深く切り裂く高音冬の鵲

まんまるに口開く土隅冬ぬくし
一年を削ぎ落したる冬木かな
人の計へ急ぐマフラー堅く巻き

札幌 中 鉢 弘 一

岸の辺に枯れし芒の穂の震へ
裸木に寄生木の毬のみ青青と
紋様を広げて凍つる北の窓
過疎の地に足跡もなく雪積る
雪しんしん遠き景色を消しゆけり

札幌 北 浦 詩 子

石狩川の兩岸繋ぐ冬の虹
海原の黒き潮目や雪催
工場の煙を崩す空つ風
妖精の悪戯といふ窓の霜
沖に向く白きフェリーや星冴ゆる

江別 佐 藤 哲

秋たくる道産馬車の鈴の音
○鱈鍋や昏れて汐鳴り高まりぬ
馳けて来し子に干草のかをりして
凧やサロベツ原野突ばかり

朝の市烏賊売る声の浜なまり

江別 太田 佳美

大掃除書架に居坐る広辞苑
極月やメモと付箋のカレンダー
ドイツ語の「第九」読み解く師走かな
婿のためシャンパン選ぶ年用意
菩提寺の除夜の鐘撞く四代目

新潟 高橋 ひろ

冬紅葉したる此の木も老いにけり
枯庭や風の転がす鉄力如露
田にひたとゐて白鳥の胸真白
鮭吊すゴム前掛の女衆
○重ね着の下へくぐらす聴診器

新潟 高野 松風

挽臼を重しとしたり十二月
舟形の木椅子の影や冬に入る
暮れのこる梢の小鳥かまびすし
紅葉の宿振子時計のゆつたりと
図書館の受付いびつな榎櫃二個

南鳥沼 森山 暁湖

冬草の道へマラソン繰り出せり
冬日射す水面を舐むる鯉の口
魚沼や空裂けさうな雪起し
照り降りに色の錆びゆく草紅葉
狛犬も仁王も阿吽雪催

益子 光岡 れい子

ふかふかの銀杏落葉へダイブの子
冬夕焼被爆銀杏の傷のあと
風湧きて落葉くるくる背に肩に
冬空へテニスサーブの声ひびく
○北斎漫画の兎跳ぬるや年の暮

芳賀 大村 かし子

街中の茅屋根傾ぎ冬ざるる
境内に冬桜散る七七忌
鳴き声の声色色や冬の鵲
着ぶくれて尚更重し身の不自由
十二月米寿を祝ふ子の料理

宇都宮 阿久津 勝利

野火止の水のかがやく小春かな

公園の葉音高ぶる憂国忌
クレーンにビルの近づく空小春
図書館の窓の男体山冬めけり
招き猫二体を載せて炬燵舟

橋木 上岡 佳子

遊水地寒雁の棹揺ぎなし
里神楽鬘の真白き猿田彦
冬耕の四隅ハの字の深轍
寒硯搔くや小舟を傾がせて
○年惜しむスローなジャズをアンコール

佐野 増田 幸子

綿虫や窯場の薪のかぐはしき
笹鳴や木の葉掃き寄す夕つ方
門口の夕日を追ふか雪ばんば
日をうけて枯蟬螂の眼に力
年用意まづは金魚の鉢洗ふ

佐野 加藤 季代

倒影の雲にも乗りて浮寝鳥
浮寝鳥背に染み入る夕日差
遊水地枯葦原の空無限

白障子に動く木の影小鳥翔つ
数へ日や紙の音する昆布束

佐野 阿部 澄

金賞と選外の菊隣り合ふ
カーテンに影の大きや冬の蝶
やや重し黄身が二つの寒卵
少年の白きマフラーぐるぐると
羚羊の上る赤城山の薙太し

佐野 芝宮留 美子

降るやうに寒禽の声神の庭
綿虫や祭祀はじめの笙の笛
降りしきる銀杏黄葉や空まさを
小春日の沼鰯にも紫紺にも
○白鳥の沼面のきらを蹴りて翔つ

佐野 島田 和枝

恙なく老いし二人や菊日和
昏れ早し狭庭に残る石路の花
溪落葉風のまにまに浮き沈み
溪紅葉揺るる吊橋渡りきる
柚子たわわ石塀多き石の町

佐野 売 野

緑

鴉島廣子さんを悼む

初時雨葬家の朝の静けさに
川音や流れに乗れる鴨の列
ひとり踏む銀杏黄葉の参道を
木枯や墨色薄れ寄進札
掌にそつと包めり雪螢

佐野 店 網 洋 子

大根抜く遠富士を見て浅間見て
小さき靴落葉の嵩に沈みたり
麦の芽や登校の子の一行に
寒夕焼雑魚の水輪のつぎつぎに
綿虫や仰ぐ益子の陶狸

足利 大 木 茂

○賑やかに鼓門打つ初霞
忌を二つ修することも年の内
おでん酒玻璃戸揺さぶる風の息
抱き合ふ地蔵に赤きちやんちやんこ
沖黒く時雨の雲の流れけり

土浦 澤 照 枝

散黄葉光を返す大風車

車椅子小春日和となりにけり

うすうすと光にとけて冬桜

○転た寝の夫と目の合ふ小春かな

石路の花浦に夕日の隠れたる

加須 茂 木 弘 子

落葉焚く煙八嶋の祠へと

戦没者の宮の日溜り冬の蝶

農の手の横笛弾む里神楽

冬の浜濡れ色美しき貝拾ふ

サーファーの冬波に乗り日の帯へ

さいま 山 本 右 近

武蔵野の風漉く冬の大櫓

しらじらと岩に影おく枯芒

江の島に日差し束ねて片しぐれ

漂へる蘆間の舟や日短

○一行で足る日貴し古日記

所沢 三 好 か ほ る

掛大根下は子猫の通りみち

煮凝や父の好みの灘の酒

青天へ鉄伸ばして柚子を採る

住み古りて実生山茶花咲く庭に
幼子の落葉ふりまく日和かな

所沢 南 雲 秀 子

湧水のほとり華ぐ石路の花

○杉の木に錦の帯や蔦紅葉

零余子飯おにぎりにして同期会

山畑を耕す夫婦木守柿

藍深く静もる冬の奥多摩湖

千葉 田 中 道 江

冬芽ふくらむ寺に立正安国論

雁の棹バルーンフェスタ始まりぬ

風に遊ぶ気球百機や秋の空

稽田を越えてマーカー落下せる

秋の虹一機残れる河川敷

千葉 松 浦 陵 保

炬燵猫今日は主人の背に乗り

コロナ明け僅かに増ゆる賞与かな

打ち明けし心のつかへ冬薔薇

秒針の一針跨ぐ去年今年

形良き枝を選びて松飾

千葉 喜多恭 仁子

錦秋やパレードに沸く御堂筋

炊飯器は三合炊きや栗おこは

小春日やかさぶたそつと剝したり

ゆるり来し冬の蚊を打ち損じたり

極月や柩に二つパイナップル

千葉 大 月 玲 子

冬空をメタセコイアが高くする

土物の野菜ばかりを買うて冬

冬茜あまねし富士を漆黒に

○悴む掌悴みし手を包みけり

短日のごみ回収車遅れ来る

酒々井 竹 澤 竹 里

実万両鳥が取合ふ裏鬼門

初日の出和願施心施深呼吸

するめ烏賊炙るストープ列車かな

柚子味噌の香りほんのり五平餅

伊勢海老の味噌汁旨し三杯目

佐 倉 内 海 保 子

頼政の塚に鬼の子ぶらさがる

切干を煮るやテレビは市街戦
烏瓜引けば裏山揺れるたり
手に負へぬ冬至南瓜や石のごと
年の暮靴の底にニツキ節

佐倉 大内佐奈枝

井戸あれば覗きたくなる石路の花
地に落つるまでを揺蕩ふ朴落葉
火袋に落葉を溜めて常夜燈
暮早し病棟にはや配膳車
天窓の結露に滲む冬の月

佐倉 三屋英俊

朱き実の熟れてすんと冬に入る
短日や夕陽に落ちてゆく鴉
神送り婆ら竹筒うち鳴らし
窓叩く風や氏神お帰りに
焚上げの爆ぜる火の粉や山眠る

佐倉 横川良子

伐採の目当てにテープ冬ざるる
静脈の青色冬の海の色
短日や早早仕舞ふ即売所

沼の魃数の少き年の暮
核心に触れぬ言訳竜の玉

四街道 奥太雅

公園のキッチンカーに列小春
柿落葉杷の爪が刺さりをり
武家屋敷裏に一畝茶が咲けり
寄生木の毬をあらはに枯木立
木守柿食ふに野禽の序列かな

四街道 塗木翠雲

小六月行司の声の裏返る
キーボード打つや勤労感謝の日
冬うららけふの日課の一万歩
冬麗や歯科医の椅子に身を預け
歳晩の明かりの消えし消防署

船橋 山下良江

○ペランダは甘き匂ひや干大根
一本の菊立ち上る庭の隅
取り合へる鴉が去つて柿一つ
掃き了へて集積場へ霜の道
また曲る地に這ふ菊を立たせても

船橋 大山 春江

冬風や影ふつくらと無人島
ビーチグラス探す海辺や冬うらら
廃船の上に廃船野水仙
冬晴や青を競へる空と海
後ろ姿母似の人の冬帽子

船橋 赤堀 洋子

うらやまを柿の染めゐる村静か
凍て空に垂れ柳の絡みあふ
夕日中羽打つ鴨の背黄金色
銀杏落葉八百年の樹齡とや
柿挽ぎし竿そのままに忘れあり

船橋 久保村 淑子

十一月農閑かせぎの研屋来る
石路の花学徒出陣八十年
落葉掃く名入りの簾荒行堂
よく働く指を捻挫す十二月
雪吊の水に映りて鯉の影

船橋 片桐 帆一

赤き葉を四五枚留め枯木立

干布団真青の空の日を吸へり
古写真もんぺ姿の母が居る
見番の白木の看板石路の花
菰巻いてお宮の松の傾ぎけり

船橋 宮本 加津代

夫の杖いまは吾の杖身にしみぬ
戦乱に飢うると記事や鴟の贅
肉じやがは煮くづれて良し小六月
物忘れ小春の縁に笑ひ合ふ
友情を温め直すおでんかな

船橋 中嶋 久登

新蕎麦は弟子屈産と墨字かな
凧や埴輪の人馬口開けて
短日や磨き終へたる鉄の先
漱石忌黄泉の連衆歌仙巻く
〇年の暮地球にビルの基礎の穴

船橋 山本 とく江

宝前に黒猫眠る神の留守
老眼鏡みがく勤勞感謝の日
参道に外語飛び交ふ菊花展

朝刊の折込み重し十二月

東京 名和 政代

夫看取る八十路の果つる年惜しむ

柏 内田 郁代

冬鴉幣新しき荒行堂

豆大福提げて句会へ漱石忌

冬晴や赤松の幹赤赤と

陵の空飯桐の実の真つ赤

冴返る天女舞ひたる格天井

柏 古川 京子

非常食くうてひとりの夜長かな

水の音かろく茶の花日和かな

五重塔背火事色の冬の暮

炭火真つ赤満蒙開拓熱く説く

時雨るるや大蛇光りの能登瓦

流山 穂 莉 照子

釣人の横に猫ゐる小春かな

猿山の冬日動けばみな動く

冬の蠅牛の睫毛へいく度も

天井の芯に龍の眼開戦日

やはらかにメタセコイアの枯れゆけり

坊ちやんの短気は損気漱石忌

〇ぬかるみの土橋に増ゆる雪ばんば

指先の指紋の消ゆる牛蒡注連

大学の学割定食牡蠣フライ

かつて住む柏印の小燕かな

東京 藤田 裕子

雪螢追うて鳥居をひとめぐり

閉づる日の間近き書店日記買ふ

戦ひはやまず待降節に入り

ひと電車見送るホーム冬夕焼

子の部屋の筆筒の跡や畳替

東京 島野 ひさ

この辺り確か菊坂一葉忌

漱石忌隣の猫を抱いてみる

乗換への果鴨のホーム大熊手

硝子窓だけは磨きて年用意

〇八十代泳ぎきつたり十二月

東京 加賀 葉子

長屋門おほふ桜の冬木の芽

色硝子へ歌声上る聖夜かな
骨董の燭台の火やクリスマス
高架線の車両にあふれ冬夕焼
釣銭を箆に脚半の飾売

東京 久留島 規子

○炬開の水屋に届くいなり寿司
時雨るるや路地に点れる常夜灯
冬日差す閲覧室に丸き背
着ぶくれて導師の法話聞く夜かな
寄せ鍋の底に残れる大目玉
丹波より豆取り寄せて年用意

東京 下 嶽 孝 一

肩の子の夜空にかざす熊手かな
老多き村したがへて山眠る
木枯の吹き残してや星ひとつ
置物のやうに翁の日向ほこ
房総の枯野を青の一輛車
どこまでも続く青空冬うらら

東京 杉 浦 一 子

冬日和肌をやさしく風よぎる
冬浅し風も素通り音もなく
空の青日に日に増して冬深し

東京 草間 三 香 子

冬薔薇卒寿の女医の棺とづ
花柄の杖や勤労感謝の日
北風家揺さ振れる音のして
濡れ縁にひそむ黒猫石路の花
十二月巡りし兄の一周忌

東京 岡 村 純 子

初霜の段段畑山羊の声
繋がれし舟が舟打つ冬の朝
一処ゆるき流れに鴨群るる
霜晴や古き町並まだ眠り
まどろみて会話途切るる冬日和

東京 桑 原 優 美 子

熊手売二指舐めてから札数ふ
日向ほこ牛乳瓶の紙の蓋
どんぶりの重なる音や晦日蕎麦
○包丁を匂ふまで研ぎ年用意

耳遠くなりても聞ゆ虎落笛

東京 三村 紀子

郵便で失せ物戻る師走かな
街駆くる配達人のサンタ帽
赤の中より赤選ぶシクラメン
手伝ひは異国の青年年の市
戦争の終りはいづこ暦果つ

東京 小池 清晴

落蟬の木乃伊と化して冬に入る
捨て置きし鉢植ゑの菊今盛り
牛乳の吹きこぼれたる師走かな
外苑の銀杏黄葉と空の青
かたかたと鳴るや昭和の冬座敷

武蔵野 砂地 宏子

旅立ちに薄紅さして冬の朝
豊の家の庭の山茶花散りに散る
○今朝にて了五年介護の古日記
冬至酒締めは柚子切り蕎麦にして
人の輪の中より聖歌辻樂士

町田 広瀬 俊雄

豆腐屋の看板にふれ散る紅葉
ぼろ市や代官餅に長き列
長靴の底を貫く柚子の刺
茶の花の垣根の下を猫通る
冬菜畑両脚跳びの鴉くる

町田 桔 梗 純

調律のピアノひびきて師走来る
木の葉降る向う三軒両隣
真砂坂銀杏黄葉の吹き溜り
冬ぬくし両手で触るる楠大樹
裸木の街を電飾埋めつくす

日野 喜多尾 明子

新しき土竜の塚や落葉濡れ
生ひしものみな末枯れて川細る
流行言葉おほかた知らずふくと汁
店先に廉価品吊り街師走
日溜りの窓にせはしき冬の蠅

横浜 西本 才子

駅に聴くピアノ勤労感謝の日

浅草に干支の辰買ふ十二月
抱へ来て湯たんぽを積む荒物屋
海原の沖まで平ら浮寝鳥
丹沢の稜線著し冬紅葉

横浜 大橋 雅子

銀杏散る日差し明るき坂の道
仰ぎつつ大楠一周冬ぬくし
着ぶかれて夜のロケ待つ物見客
鮭軟骨こつこつと食む年の暮
雉鳩の庭を啄む凍つる朝

横浜 山崎 郁子

冬の畑芙蓉残れる通学路
穴掘つて雀砂浴ぶ冬日和
枯草を積みば小鳥の潜みたり
甘柿と白き土蔵の祖母の家
奥能登や窓越しに見る冬の海
少しづつ片付く部屋の寒さかな
庭の柚子五つを浮べ仕舞風呂
夕暮れて八手の花の白さかな

横浜 田賀 榊 恵

過ぐる時花柵の匂ひたつ
冬耕の影絵のごとき老農夫

横浜 小坂橋 泰山

雨戸繰る朝の寒気や長廊下
しぐるるや鈍色深き貨物船
一面の銀杏落葉の日の匂ひ
○梟の声を乗せたる森の風
川音にまじる小雨や蕪汁

横浜 三木 豊子

年の瀬や南京街に占ひ師
てつぺん迄葉の落ち切つて木守柿
大根を使ひ切つたる夕餉かな
歌舞伎はね冬満月へ歩みけり
○薬師寺に奈良の墨買ふ年の暮

川崎 新妻 奎子

一刷毛の雲延びゆけり蜜柑山
骨密度年相応や枇杷の花
カーテンを半分開けて冬の月
鬼平を読みふける夜根深汁
○ポストまでひとつぱしりや空つ風

川崎 大久保 進

暮早し鍋に湯氣立つ屋台の灯
曳き船の浅き喫水神渡し
静脈をさぐる針先冬ざるる
だるまさんがころんだつつと落葉
日だまりに寸余の影の寒雀

鎌倉 恒川 清爾

殉教の祈念の坂や落葉降る
日の匂ひベンチに探す十二月
冬ぬくし翔平の犬耳垂れて
読まぬまま並ぶ全集漱石忌
時雨るるやあかんべえして別れをり

横須賀 織田 みさゑ

明けきらぬ下弦の月の白さかな
前山の黄色が勝る冬もみぢ
たをやかに風をいなして残る萩
終生を次女とふ脇役吾亦紅
身に沁むや住所録より消ゆる友

伊勢原 佐藤 和子

くすの木の真下に湧いて冬の水

芙蓉枯れ日毎に海の紺深む
冬ざれや降り立つ駅舎がらんど
ひゆうひゆうと冬木を鳴らす山の風
熊汁の鍋ごと届く山居かな

静岡 大村 峰子

吊し柿へ鴉屋根板踏み鳴らす
犬小屋に形見となりし襦袢かな
耳と目と笹子移るを追うてをり
初風呂や眺むる茶臼岳夕茜
手造りの味噌の香籠る初厨

静岡 海野 みち子

曳売りの売手買手の着ぶくれて
雨叩く厨の窓に枯蠟螂
○冬耕や石ころ多き背戸畑
草虱背一ぱいに猫戻る
草の実とる猫に小言を言ひながら

静岡 宮崎 知恵美

渡船行く紅葉筏を崩しつつ
切株に休む足元濃竜胆
自然薯を摺つて客待つ漢かな

義元の鎮座す秋の祭山車
舞の子の口唇赤し秋祭

静岡 岩崎 武士

夜勤明け蒲団干しをる消防士
包丁を冬至南瓜に取られけり
着ぶくれを吐き出すラッシュアワーかな
漱石忌パーパーナイフよく切れて
真ん円の日の出天皇誕生日

静岡 望月 敏男

霜月も末や籤買ふ人の列
日向ほこ柱時計の鳴りゐたる
ずつしりと荷台に沈む今年米
○鎌上ぐる影まで折れて枯蟪蛄
緑児の蒲団の乳の匂ひかな

静岡 藤原千代子

神木の洞の中まで冬日差
冬日向溶岩に実生の松小檜
曆師の庭に日時計かじけ猫
神苑の鹿のこぼれ餌寒雀
万年の溶岩さらし池涸るる

○掛け違ふ上着の釦憂国忌
火を埋むごとくに日暮冬田面

静岡

荻野加壽子

影踏みて影に鱗入る寒さかな
青空へ千手伸ばせり大冬木
三叉路を抜けて三叉路街師走

静岡 小川 明美

冬ともし家康の見し世界地図
今朝の冬木陰に鳩の喉鳴らす
朗朗と古文書を解く小春かな
鹿苑の餌場に冬日集まりぬ
ピロードの議長の椅子に着ぶくれて

静岡 藤本 節子

小春日や鹿の餌場に烏骨鶏
走り根のこんがらかつて寒波来る
正座して卒寿の膳や菊膾
寄席はねて聖樹の街へ紛れけり
○冬の川底の芥の鎮れる

静岡 大長 文昭

根深引く土の衣を崩しつつ

枯蠟螂石を枕に果てにけり
日向ほこ大笑ひして散りにけり
母の忌のめぐる十歳や煮大根
天領の杉を冬日の貫けり

静岡 加山 ひさ子

くくくくと近付く鳩や冬日向
親方の土方弁当冬ぬくし
台布巾に母の針目や時雨来る
擦れ違ふ子らとおはやう花八手
小雪の水溢れしむ三島かな

静岡 石川 裕子

起きがけに羽織るや妣のカーディガン
花八手喪中の葉書けふもまた
軽トラの研屋来てゐる師走かな
冬落暉頭垂れたるシヨベルカー
セキセイインコ探す貼り紙年つまる

静岡 本多 ひとみ

凍雲の迫り一湾鈍き色
寒鴉防潮堤を動かざる
冬川や流るるものに葉のひとつ

水涸るや亀甲紋の鱗の畑
校庭に渦巻く砂塵冬ざる

静岡 杉 澤 修

千年の冬日を刻む御神木
僧坊の松影揺るる外障子
山茶花の一朵灯せり奥の院
綿虫や樞の根方の力石
箒目に枝垂るる梅の冬芽かな

射水 成瀬 真紀子

もぐる鳩浮く鳩水輪次次と
日に風に冬枯の野のかんばしき
綿虫や口を閉ざせる反抗期
キーン展出でて明るき冬はじめ
牡蠣殻の絵馬に恋文時雨虹

金沢 中 條 睦子

菩提樹の落葉あかるし純子句碑
山門を軋ませ閉づる夕時雨
佗助のころげ畳に蜜こぼす
虹かかる田へ降りきたり小白鳥
落葉搔く音にはじまる寺の朝

金沢 今越みち子

ピオラの花増ゆる坪庭冬ぬくし
腰掛くる影のずんぐり日向ほこ
尾鰭めくジェット機雲よ冬晴るる
小春日や休み休みの庭仕事
グラタンに火傷しそうや雪の夜

金沢 伊藤美音子

綾子句碑に鳥鳴き交す今朝の冬
一服の杉の切株笹子鳴く
樹に会釈して雪吊りの始まりぬ
墨匂ふ法会のピラや小六月
空耳に返事してゐるちゃんちゃんこ

金沢 高田たみ子

節太き十指自在に落葉搔く
臼と杵でんと据ゑたる年の市
スーパ一の自動支払ひ着ぶくれて
板につく姉さん被り大根焚
○授かりし小春日和や墓磨く

金沢 豊田高子

花時計針に冬至の日の翳り

岩を打つ水は饒舌野水仙

○なめらかな水を四角に紙漉けり
猟銃のタアーンと筈あとの黙
菓なだめ三百キロの注連縄へり

金沢 松井佐枝子

枯参道尺の地蔵の道しるべ
銀杏散る鳥居を出でて糸切餅
冬あたたか餅屋の屋根の大黒天
学舎の池に馴染みし尾長鴨
猫が猫追うて木登る小春かな

金沢 石川純子

鰯汁の鍋をどつかと若女将
○たもとほる会話の耳に冬の鵲
仕舞うた屋戸口に枯葉吹きだまる
図書館の灯りぼつぼつ暮早し
歳晩や買物のメモ走り書き

金沢 河野尚子

麦の芽の一寸のはや影を持ち
明日は雨急ぎ抜きたる畑の燕
能登の果て荒磯打てる波の花

酒蔵に加賀の新米積まれたる
彼方此方戦のやまず年の暮

金沢 道場 啓子

木守柿その下に猫ちんまりと
ステッセルの謂れの棗実を落す
遠白山稽穂風に揺れどほし
木の葉雨七味山椒小分けして
冬帽子鏡の中に妣在す

内灘 塩井 志津

若冲の鶏見て帰路の照紅葉
轟音のラリーや落葉蹴散らして
夕映ゆる一揆の山の冬紅葉
すさまじや岸駒の虎と目の合ひて
家路なる袴引き摺り七五三

七尾 谷 渡 末 枝

葱刻む朝のドラマは十五分
散るために山茶花白を尽しをり
極楽の顔して御座るちやんちやんこ
炬燵守甘納豆を止められず
半島の付け根揺さぶる鯉起し

敦賀 倉谷 紫龍

日の落つる異人の墓地や実南天
河豚鍋や同級会の廻し酒
ひとり居の藁葺門や花柵
初氷割る登校の子のズック
県境の比良の稜線冬木立

敦賀 倉谷 ます美

河豚刺の薄き身箸に軽きこと
巫女の売る厄除けおせん冬めける
時雨忌や墨入る句碑に声聞ゆ
○柏槇のうねりを仰ぐ小春かな
冬木立電飾点す銀の鈴

敦賀 鶴田 勝子

草に木に光のつぶて冬立てり
女将らの泥にまみれて蓮根掘る
冬めくや画鋏ばかりの揭示板
墨直す句碑に落葉のしぐれかな
枯尾花わが終焉の地にまぶし

敦賀 中川 雅月

一の酉押されて歩く浅草寺

玄帝を睨み据ゑたる鬼瓦
マネキンの指先白く冬めける
若狭河豚身内寄り合ふ祝膳
大根の桶を埋むる五千本

敦賀 中 村

優

数へ日や診察室のカレンダー
湯豆腐の最後の欠片浮き沈む
課長補佐締め雑炊仕切りをり
電飾のひときは青く冬めけり
キューを待つ氣象予報士着ぶくれて

大阪 入 山 繁 幸

六甲の山連なりて片時雨
顔見世のまねき最後は團十郎
鷹匠の下手投げより鷹飛べり
鰯酒を交しつ友と孫談義
大旦これより孫と三世代

徳島 福 島 吉 美

歌舞伎座に食ぶる夜食やにぎり飯
暮れ早し寺に駆け込む豆腐売
放し飼ふ孔雀の遊ぶ十夜寺

稽田へ棟上げの餅高く飛ぶ
象亀の食みこぼしたる薩摩芋

徳島 村 上 和 義

山羊の乳搾る手の指悴みて
鳩の鳴く柱時計や冬座敷
花街の花売る少女息白し
仏壇の金鶏勲章山眠る
活断層斜めに走る冬の雨

徳島 宮 西 修 一

対岸の空は明るし初時雨
冬耕といふ程もなし畑十坪
飛び立つて大河を乱す鴨百羽
おでん屋の暖簾の灯ガード下
〇立ち上げの遅きパソコン十二月

徳島 平 岡 功

波風を尖らす大河冬に入る
大屋根にふくら雀の並びをり
怒濤聞く砲台跡や石路の花
機窓いま漆黒の富士冬茜
夕星を梢に飾る枯木立

石井 木内 マヤ

たまごかけごはん勤勞感謝の日
落語会大入り袋と鯛焼と
足の指きゆつとほどけり掘炬燵
ストーブの灯油ドクンと落つる音
北下し我が家の庭の風の道

小松島 岡田 あゆみ

ことこととひよこ豆煮る小六月
小さき葉に小さき音立てしぐれけり
襦袍着て我プーチンと同じ歳
床に立つ錠剤ひとつ今朝の冬
老杉の聳ゆる古刹牙返る
○薄皮の力漲る熟柿かな

室戸 安岡 みさき

○やぶにらみして雪肌の木偶凍つる
おそろひの藍のシヨールの阿波みやげ
島と島渡す大橋瀬戸小春
湯豆腐にやさしくなりぬ箸の先
虚子句碑の足許照らす石路の花
土の香のあがる牛蒡を引きてより

長崎 丸本 祥夫

立てかけし金剛杖に赤とんぼ
舐ひ網放る間合ひや草紅葉
○蓑虫の引つ張り返す力かな
湧水の桶にひしめく新豆腐
西海 山下 敦子

降りしきる黄葉のなか棺ゆき
日落つれば魚の煮つけと今年酒
蔦の葉を残して行けり初風
○寒晴やぎざぎざ尖る海の果
石垣のくぼに凍蝶うごかざる

那覇 大湾 宗弘

辺戸岬波の微塵へ冬の虹
鉤爪にがつきと獲物海の鷹
スケートの踵のほてり夜行バス
北風に雨混じる夜の湯漬飯
年の瀬のなかなか点かぬガスこんろ

那覇 中本 清

自若たる鰐のまなぶた冬至寒
時刻む師走の村井藻のそよぎ
首里杜に龍を眠らせ年送る
陶房の時計の音も師走かな

掃納火入れ待ちたる登り窯

西原 宮 城

勉

蟪蛄の土偶の貌に枯れており
三猿になりて老いるか開戦日
冬日跳ね走者の腓また腓
両腕を広ぐ聖像冬の虹
嵌め終るジグソーパズル大きくさめ

登見城 渡 真利 真澄

○居酒屋の袋小路や十二月
寒灯の一灯で足る古本屋
劇場をどつと出てくる裘
冬ごもりゐて作り置く保存食
呻吟の作句あきらめ柿を剥く

ベルリ 鈴 木 波 江

赤べこの首揺らしつつ温め酒
寒月やむくむく育つ豆もやし
我が靴の雪哭く音と花屋まで
男傘さして巡りぬ聖夜市
亡夫の樹へ鉄扉くぐりぬ降誕日

謹 告

三澤治子氏（同人・茅ヶ崎）は、ご療養中
のところ、令和六年一月六日、逝去されま
した。享年百歳。

お母様の三澤たきさん（平成二十年 百七
歳で逝去）、妹さんの三澤いつ子さん（平
成三十年 八十九歳で逝去）とともに俳句
を楽しまれ、最後までご自分のなさりたいこ
とをやり尽くした見事な一生でした。

度重なる「万象」へのご協力に感謝し、謹
んでご冥福をお祈り申し上げます。

万象俳句会

同人会だより

「万象」オンライン同人句会の参加者募集

オンライン同人句会は、全国の「万象」同人が共に切磋琢磨する場として発足した句会です。PCまたはスマホの簡単な操作で参加することができます。

オンライン同人句会に少しでも興味のある方は、事務局へお気軽にお問合せください。

◆オンライン同人句会の実施要領

〔句会は「夏雲システム」を使用〕

① 対象は全国の「万象」同人とする。

② 月例で行い、句会費は無料とする。

③ 投句 3句

④ 選句 名譽主宰・主宰…10句
顧問・役員…7句
同人…3句

⑤ 投句期間 毎月 1日～5日

⑥ 選句期間 毎月 6日～9日

⑦ 結果公開 毎月 10日

◆参加申込はEメールで事務局（沢田たけし）まで。

メールアドレス jundayuu@xd6so-net.ne.jp

（電話番号 090-7637-5661）

・申込の方には事務局より簡単な操作説明とパスワードを返送いたします。

1月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

3	4	5	6	7	8	9
掃初は地震に割れたる硝子とは	対岸は国生みの島初明り	列島の淑気ふるはす能登地震	紙漉女山からの水踊らせて	京の路地歩幅が音となる寒夜	針仕事冬日の端を拝借し	漁火と繋がつてゐる冬銀河
眩しげに赤子この世の初日浴ぶ	元日の避難コールの鳴り止まず	子と偲ぶ妻の話へ除夜の鐘	繋がれし舟が舟打つ冬の朝	凍星や返信メールもう来ない	オリオンの天の深きへ逝きたまふ	大人へと少女はコート翻す
鯛捌く氷見の潮の香失せぬやう	数の子を噛めば砂丘を歩む音	初暦表紙懐かし綾子の句	齒の神の次は目の神初参り	語り合ふ余命いくばく根深汁	板前の隠れたばこや冬の月	大仏の厚き胸元初明り
富士塚の頂上譲り合ふ二日	襟元を少し直して屠蘇を受く	零歳をあやす二歳の御慶かな	三屋 英俊（佐倉）	山下 敦子（西海）	恒川 清爾（鎌倉）	右近（さいたま）
成瀬真紀子（射水）	宮西 修一（徳島）	小池 清晴（東京）	村上 和義（徳島）	山本 右近（さいたま）	荻野加壽子（静岡）	平岡 功（徳島）
山本とく江（柏）	中川 雅月（敦賀）	中村 千久（志木）	岡村 純子（東京）	穂苅 照子（流山）	江見 悦子（東京）	紅露 恵子（札幌）
古川 京子（柏）	内海 良太（佐倉）	成瀬真紀子（射水）	三屋 英俊（佐倉）	柳澤 宗正（横浜）	山本 右近（さいたま）	恒川 清爾（鎌倉）
大仏の厚き胸元初明り	富士塚の頂上譲り合ふ二日	襟元を少し直して屠蘇を受く	零歳をあやす二歳の御慶かな	三屋 英俊（佐倉）	山下 敦子（西海）	恒川 清爾（鎌倉）

（＊句頭の数字は点数を示しています）



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に生き物を表す漢字を入れてみましょう。

- | | | |
|----|-------------------|-------|
| 1 | 除夜の妻□□のごと湯浴みをり | 森 澄雄 |
| 2 | □も片耳垂るる大暑かな | 芥川龍之介 |
| 3 | あをあをと空を残して□分れ | 大野林火 |
| 4 | 秋来ぬとサファイア色の小□買ふ | 杉田久女 |
| 5 | 秋風や屠られに行く□の尻 | 夏目漱石 |
| 6 | びいと啼く尻声悲し夜の□ | 松尾芭蕉 |
| 7 | 吹きおこる秋風□をあゆましむ | 石田波郷 |
| 8 | □□の眸のかうかうとして売られけり | 加藤楸邨 |
| 9 | □ずしや彦根の城に雲かゝる | 与謝蕪村 |
| 10 | ゆるやかに着て人と逢ふ□の夜 | 桂 信子 |
| 11 | 全長のさだまりて□すすむなり | 山口 誓子 |
| 12 | みちのくの□は醜し吾もみちのく | 山口 青邨 |

【正解】

- | | |
|----|----|
| 1 | 白鳥 |
| 2 | 兎 |
| 3 | 蝶 |
| 4 | 鯨 |
| 5 | 牛 |
| 6 | 鹿 |
| 7 | 鶴 |
| 8 | 雉子 |
| 9 | 鮒 |
| 10 | 螢 |
| 11 | 蛇 |
| 12 | 鮭 |

思い出す人々

西山 厚 全24回

第13回 【宮沢賢治】

ふたりの少年は、夜空を走る不思議な汽車に乗っていた。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』。

これは、ふたりのうちのひとり、ジョバンニの夢。

もうひとりの少年カムパネルラは、現実世界では、友

を助けようとして、川でおぼれて死にかけていた。

汽車にはさまざまな人が乗り込んできて、また降り

ていく。窓からは、真つ赤に燃えるさそりが見えた。

さそり座だ。二人はさそりが燃えているわけを知る。

これまでに読んだ数限りない本のなかで、一番悲し

かったのは、この本の、この場面だ。

どこまでもどこまでもいっしょに行こう。僕はもう、

あのさそりのようにほんとうにみんなの幸いのためな

らば僕のからだなんか、百べん灼いてもかまわない。

けれどもほんとうのさいわいはいつたい何だろう。

カムパネルラ、僕たちいっしょに行こうねえ。

ジョバンニがこう言いながらふりかえって見ました

ら、そのいままでカムパネルラのすわっていた席に、

もうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかり

ひかっていました。

同人作品の佳句

江見悦子

初氷白し夜明けの地の窪み 落合裕子

初氷の張った夜明けの北海道の情景である。庭や野原、いたるところにある地面の窪みが白色に変わって、初氷が張ったと分かる。上五の「初氷白し」で切れ、中七の句またがり、それが「夜明けの地の窪み」なのだと捉えている。気宇壮大な詠みぶりで、発見、認識の句と言える。

はじまりはワルツのやうに雪降り 紅露恵子

はじまりがあれば、途中があり、終わりがあある。数か月に及ぶ北海道の雪の季節が始まった。「ワルツのやうに」と形容した紅露さん。道産子であっても、初雪はやはり格別のものなのだろう。ワルツの軽快なステップにも思える初雪が降る様に、心弾ませる作者。

白鳥の水面のきらを蹴りて翔つ 芝宮留美子

冬晴の沼を飛び立つ白鳥の瞬間の姿を詠んだ。「きら」は光のきらめき、の意。水面にきらめく日の光を蹴り、光をまといつて空へ飛び立つて行く白鳥の、はなやかで神秘的な姿を活写している。原句には「沼面」とあったのを「水面」とした。「沼面」は、まだ十分には熟していない熟語だと思う。

転た寝の夫と目の合ふ小春かな 澤 照枝

冬の季語「小春」は陰暦10月の異称。立冬を過ぎてても厳しい寒さはまだ訪れず、しばらくは穏やかな日和が続く。それ

が小春日和。

暖かい冬の昼間、ふっと転た寝から覚めた夫と目が合った。なんというこのない瞬間が、特別のものに思われた。長い間共に過して来た夫との心の通い合いなのか。原句の「縁小春」を「小春かな」と添削した。「○○小春」という形は避けたい。

杉の木に錦の帯や萬紅葉 南雲秀子

山歩きの好きな南雲さんのお馴染みの場所は奥武蔵。杉の植林地帯が多い。杉山にからんだ萬の紅葉の有様は、赤、黄と、まるで錦の帯を懸けたように美しく鮮やかだ。文部省唱歌の「もみじ」に歌われた懐かしい情景を思い浮かべた。

年の暮地球にビル基礎の穴 中嶋久登

年の暮になってビル建設の工事が休みに入ったせいか、鉄筋を打ち込むための基礎の穴が並んでいるのが目に入った。その穴が地球に掘られていると詠んだ作者。なるほど、その通りだ。我々はこのように、地球に穴を空け続けているのかもしれない。批判精神豊かな句。

炉開の水屋に届くいなり寿司 久留島規子

季語「炉開」は、冬になって炉を使い始めることをいう。茶道では陰暦10月初旬の亥の日を選び、風炉を仕舞い炉を開いて、火入れを行う習わしである。開いた炉には翌年の晩春まで釜をかける。

「炉開」の準備に余念がない水屋に、いなり寿司が届いた。お弟子さんたちが腹ごしらえをして、大事な茶事に備えるのだらう。裏方である水屋の情景と、表舞台の茶会との違いも想像され、俳諧味のある句となった。

庖丁を匂ふまで研ぎ年用意 桑原優美子

新年を迎える用意には様々あるだろうが、桑原さんは先ず庖丁を研ぐことから始めた。一心に研いでいると鉄の金気臭いにおいがして来た。研ぎあげてからは出刃包丁で魚をさばくのか、或いはお節料理の準備だろうか。台所には様々な匂いが充満しそうだ。鉄の匂いという嗅覚を生かした句。

鎌上ぐる影まで折れて枯蟪蛄 望月敏男

緑が薄れ錆色に変わった冬の蟪蛄、枯蟪蛄が鎌を振り上げている。その影が地上に、或いは迷い込んだ室内の障子の向こうに映っている。「影まで折れて」と詠んだところに、今やもう立ち向かう力をなくした枯蟪蛄が、鎌をもたげている姿に哀れさが募る。

たもとほる会話の耳に冬の鵒 石川純子

「たもとほる」は、動詞「もとほる」に接頭辞「た」が付いたもの。同じ場所をぐるぐるまわる、行ったり来たりするの意。この句、いつまでも続く会話が、同じことを繰り返すばかりでどうにもまとまらない。いらいらしていると、耳が鵒の声を捉えたのである。冬の鵒は、秋の鵒の鋭い声とは違ってあまり鳴かなくなるそうだが、会話を途切れさせるには十分な声。これがきっかけとなって、収まりがつけば良いのだが。

立ち上げの遅きパソコン十二月 宮西修一

宮西さんは、福島せいぎさん主宰の「なると俳句会」の「虎の子句会」で幹事を務め、また俳句誌「なると」の編集の一員でもいらっしやる。

令和5年も、パソコンに向かって過ごすことが多かった。

使い込んだこのパソコンも、十二月になって立ち上げが遅くなったけれどまだまだ働いてもらわねば、と相棒のパソコンを労っている作者。季語「十二月」が効いた、共感を呼ぶ句である。

薄皮の力漲る熟柿かな 岡田あゆみ

柿が日本にやって来たのは8世紀の奈良時代だそうだが、以来改良されて多くの品種が生まれた。柿好きの筆者にとつては、渋を抜いたみしらず柿から始まり、掲句に詠まれた「熟柿」まで、先人に感謝する幸せな時間が続く。完熟した「熟柿」のとりりとした甘さには脱帽である。「熟柿」の薄皮に力が漲っていると捉えたのは、まさに甘柿が頂点を極めた姿、凋落が始まる直前の姿を詠んだ佳句。

やぶにらみして雪肌の木偶凍つる 安岡みさき

高知に住む安岡さんの句と知ると、この木偶人形は淡路の人形浄瑠璃のものかと思う。楽屋に保管され、出を待っている人形の姿なのだろう。衣装はつけているのかどうか。凍える寒さの中、胡粉を塗られて真白な肌の木偶人形がやぶにらみの目つきのまま置かれている。魂を入れられて今にも動き出しそうな木偶人形の、不思議な存在感を感じる。

寒灯の一灯で足る古本屋 渡真利真澄

寒夜、暗い通りの中に灯の漏れている店が一軒。棚に台の上にと本がびっしりと並ぶ古本屋だ。店内を照らすのは「寒灯の一灯で足る」小さな店。「寒灯」の季語からは、ものさびしさが漂う。夜まで店を開けていても大した稼ぎにはならないが、奥の机にひっそりと座っている主人の姿が想像される。「寒灯」が動かない。

肥前十一月

田中道江

肥前の空気球あそびす十一月
発掘の鍬の柄につと秋茜
屈み出る堅穴住居雁の棹
太古の風ゆらす花蕎麦淡紅に
雁渡る弥生の空の真澄なる
筑後川川面をぬめる秋日かな
昇開橋ごとりと昇る秋高し
神無月宮の気統ぶる樟千年
閉めきつて三百式拾壹白障子
鱗走る白磁の鳥居冬に入る



今までにはただ通り過ぎるだけのことが多かった佐賀県へ、誘われる機会がありふらりと出かけることになりました。

予てより望みの「吉野ヶ里歴史公園」をはじめ「佐賀城本丸歴史館」「松原神社」「筑後川「昇開橋」等。御多聞に洩れず暑い熱い三日間でしたが、足の向くまま気の向くまま興味深く見物。帰途は「太宰府天満宮」の「仮殿」に参拝。

道中東の間触れ合った人の優しさにも感謝しての独り旅でした。

平和観音

島田和枝

秋うらら平和観音拝したり
観音は八十八尺鳥渡る
観音の裳裾に菊の色の濃し
聳え立つ奇岩にからむ蔦紅葉
秋高し天狗の投石揺なく
雁や掘る音絶えし石切場
冷まじや地下千丈の鑿の跡
黄落や奇岩の山へ径細る
千振の家裏に乾く石工小屋
深秋や路地に石工の軒つらね



宇都宮市の西方、石の町大谷に建つ平和観音は、第二次世界大戦の戦没者の霊を弔うために着工。六年余の歳月をかけて完成した。高さ八十八尺八寸八分、大谷石の柔らかさからか、あたたかさを感じさせている。観音の左側の階段を登り詰めれば、関東平野も一望できる。

石の町・大谷は、大谷寺と共に多くの人々に親しまれている所である。

今も外つ国では戦争が続いている。戦争のない平和な世界を祈るばかりだ。

小春

谷渡末枝

句集「微風」のあとがきを読めば、人とかかわつての、
パワフルな俳句の道がよく分かる。是非一読を。

さて、今回の十句、動と静の俳句に迫つてみたい。

豚足を煮詰む木枯戸を叩く

檻樓切れて牛の貌拭く小六月

兎の皮剥ぐ小刀を血の伝ふ

一句目、コラーゲンたっぷりの豚足。毛を剥ぎ「煮詰む」のは大仕事。「木枯戸を叩く」の措辞でその事がよく分かる。

二句目、「檻樓切れ」で「牛の貌拭く」とは、手慣れた行動。「小六月」の季語で、ほっと一息する。

三句目、「兎の皮剥ぐ」とは、なんと大胆な句。「小刀を血の伝ふ」も凄いい句だ。この兎は、野兎か。

剝製の雉子微動だにせぬ小春

紛れなく馬の瞳にある寒さかな

動の句から静の句へ。一句目、「剝製の微動だにせぬ」と、作者の澄んだ目がいい。「小春」のいい日和だ。二句目、「馬の瞳にある寒さかな」で、七尾の厳しい冬を馬と共にある作者。両句とも愛ある姿に、ほっとする。

とにかく、圧倒される十句であった。今後とも、「万象」「りのい」で、「リイノスキンダー」も含めて、パワフルな行動俳句を進めてほしい。

作者の田作り・機織りの句も、楽しみに注目したい。

五湖の里

鶴田勝子

永く公務員の職にあった作者。落ち着きのある対象把握で詠まれた十句。柔軟な感性のある句を追つてみたい。

年縞の七万年や湖の月

献上の極上実梅紅をさす

湖山の狭間のくらし竹を伐る

一句目、「年縞」(縞模様様の湖底堆積物)の「七万年」とは、随分と昔の時代から続く三方五湖。「湖の月」の閑かさがいい。

二句目、「献上の極上実梅」とは、湖と共に歩んだ土地ならではの実梅。皇室への献上品か。実梅が紅をさすのを、見逃さない作者も目がいい。

三句目、落ち着いた「湖山」、その「狭間のくらし」。

いい風景である。「竹八月」と、季節を違わず「竹を伐る」閑かなくらし。「狭間のくらし」がぴったり。

船神興海へ漢の落し合ひ

水中に裸の荒男綱を引く

穏やかな暮しの中の動きのある二句。

一句目、「船神興海へ」「漢の落し合ひ」とは、なかなか勇壮な句。落とし合いをじっと見つめる作者。

二句目、湖の漁の句。「裸の荒男」の措辞がいい。綱を引く漁は公魚か。活気ある湖の漁がよく分かる。

十句を通して、作者の落ち着きのある安定した作句への構えを感じる。永年培った姿勢こそ素晴らしい。さらに佳句を。

同人作品鑑賞（二月号） 中本 清

雨音とテネシーワルツ聴く夜長 横川 良子

雨の夜に、ラジオの深夜番組から「テネシー・ワルツ」が流れてきた。歌うは「去りにし夢、あのテネシー・ワルツ」の江利チエミか、「My friend stole my sweetheart from me」のバティ・ベイジか。どちらの曲も失恋の孤独感とせない声質。そしてメロウな三拍子のメロディ。作者は、青春の欠片を拾うように「雨音と」共に耳を傾ける。

稲つるび布袋の臍の金剥れ 小川 明美

可笑しみの滲む句である。古来、「稲つるび」の雷光は、稲と交わり、開花・結実させる霊力があると信じられている。一方、雷が鳴ると、おへそを取られるという俗説もある。隠し損じて、雷様にポッコリとした腹のおへそを取られた布袋様。金運の神様のおへその金が剥れて、ご利益が心配な布袋様。「稲つるび」と上五に置いた軽みがいい。

秋の夜子犬の声を遠く聞く 吉野美智子

秋の夜気が身に染みるような夜更け。月影ははっきりと明るい。虫の声も聞こえる。その静寂の中に、作者は子犬の声を遠くに聞いた。貰われてきて、親を恋うているのか、ひも

じい思いをしているのか。子犬を案ずるうちに、訳もなく寂しい感情が、作者の心にひしひしと迫ってきた。平明で静かな文体であればこそ印象に残る作品。

猫の目に月の色ある良夜かな 成瀬真紀子

「猫の目に月の色ある」をどう鑑賞するか。月明かりの中、澄んだ眼差しで作者の心を覗き込むように見つめる猫の目に、宇宙の力が生み出す神秘的な「月の色」を見る。親しく寄り添うのは中秋の名月であった。

黒猫の影引き摺りて月の庭 山下敦子

見かけよりも不思議な内容を持っている句である。夜空が澄みわたり、月が大きく明るく輝く庭。「黒猫」が歩を進めている。自らの黒い影を地に引き摺りながら。一方、黒猫からの視点に変えると、じつと見ている作者の影も濃い。作者も、黒猫と同じように心の中に何かを引き摺っている。そして、誰かに見られているのではないかという微妙な感覚が湧いてくる。「黒猫の影」という発見がこの句を引き上げた。

新^ミ北風^ニや城主の墓へ一つ徑 渡真利真澄

「新北風」は沖繩の秋の季語。サシバが渡る頃吹く北風で、寒露の頃にあたる。長い夏から解放され、秋の気配を肌を感じる。琉球の王統史の中には、首里の王陵に祀られなかった王もいる。秋草の径は、そうした王の墓への径であろう。



江見悦子自選句鑑賞⑥



うたた寝のまぶたの痒し蝶の昼

〔砂時計〕（68）

うたた寝の心地良さを知ったのは、いつ頃からだったか。

子供の頃は思い切り遊び、思い切り寝たものだ。

幼い頃、廊下の日溜りの中に目覚めて独りぼっちであることに気付き、不安と寂しさに泣いたことがある。母が父と逢うために訪れる、丘の上の家の春の日溜りだった。誰にも知られる事のなかった涙だった。

掲句の「うたた寝」には、少し甘い恋の肌ざわりがある。ほどよい倦怠感を「まぶたの痒し」と詠む。それは、「蝶の昼」の眩しさであろうか。蝶が落としていった淡い翳りだろうか。体感の、そして心象の写生句である。

句集を繙く時、対峙の一句が読み手の物語ともなつて、心添えるのは嬉しい。懐かしく哀しく、遠い日の記憶が蘇る。美しい微睡のひと日。佳き日との出会いをいただいた。

目葉のあらかたこぼれ鳥曇

カステラのざらめさりさり桜時

売りに行く古ブランデー夏の月

季語の力を信じて詠む。悦子俳句の抒情は、体感に生まれ実感に掴み取る言葉の力にある。

（前田貴美子）

潜き鵜の水輪を春の鴨すべる

〔万象〕 令和4年4月号

令和4年、これより江見さんは万象四代目の主宰に就かれた。「万象」4月号には新主宰としての「ごあいさつ」が、また主宰作品として初回の七句が「春の鴨」と題して掲載された。

掲句はどこか大きな池か沼を前にしての囁目吟だろう。眼前に広がる風景、日差しはすでに明るく、水もゆるびはじめて水鳥たちが水面を賑わしている。真鴨や小鴨、鴛鴦や鳩などそれぞれ自在に泳いでいる。そんな中、一羽の鵜が潜り、大きな水輪が広がった。すると、その滑らかな水輪に乗って鴨がすべるように泳ぎだした。鵜の作り出した輪と鴨の水脈の交差。眼前の景を一気に詠みくだした句である。「春の鴨」の響きが明るく、陽光の下の水辺の情景が鮮やかに浮かび上がる。

主宰には「万象」が基本とする写生を体現した秀句が多い。まっすぐな目で対象をつかみ取り、的確な言葉で表出する。整った句の姿と、調べの爽やかさが魅力だ。余分な思い入れの語や、観念に依るところがない分、褪せない力がある。学びたいところである。

なお私は「春の鴨」を、前主宰の事績の後を継ぐべく颯爽と登場する新主宰の姿に勝手に重ねたりもするので。

（喜多尾明子）

受贈句集拝見

森野 稔

『砂時計』

江見悦子（杉並区）

作者は沢木欣一の「風」が終刊になってから新たに創刊された「万象」の編集人・発行人を経て令和四年に「万象」の第四代主宰に就任されている。第一句集『朴の青空』に次ぐ句集として平成二十五年からの十年にわたる三百句が収められている。俳句の出発点は「風」なので「即物具象」という俳句の背骨となる部分はしっかりと継承しながら「個性と新しみのある俳句」を目指している。

梅雨深しサウナに銀の砂時計

集名にちなんだ句。この句について「あとがき」で作者は「内も外もたつぷりと湿気を含んだ深々とした世界に、砂がさらさらと落ちてゆく時間が、何より大切なものとして思い出されます」と書く。この時間という意識が作者のなかに深く根を下ろした作品も多い。

松の峭雪だけの糸いく筋も

薄氷のかげらの動き始めたり

えごの花こぼれて時を刻みけり

最初の二句は、作者の眺める静謐なまなざしに物が静かに変わってゆくという、これも時間というものへの働きによる。三句目は時間そのものを俳句の中に落とし込むことによってえごの花そのものを活写している。地面にこぼれている黄金色の花、そして枝についている無垢な白花、それ

らを繋ぐ時という目に見えない働きの事象に気づく作者がある。

作品の中に旅吟が多い。それも日本だけではなく世界中に足を運ばれている。

遠雷や岩屋に千の摩崖仏
孔子廟の庇を翔てり夏燕
青ぶだう畑へ開く城の窓
ダリを見しまなこの疲れ白睡蓮
暖炉燃ゆハブの木椅子に脚ゆるく
大夕立ひめしやらの幹くれなるに
固有名詞を使わなくても、中国だな、欧州の城だな、東南アジアだなということが作品から匂ってくる。

父の手を握る別れや虫の夜

父在さぬ庭に増えたり曼珠沙華

明易し気配確かな母の夢

極月やにはかに増ゆる夫の愚痴

この時期に父を亡くされているが、父を含めた家族に視点を向けた作品を抄出した。

辻立ちの寒行僧の眼に恋す

匂ひ立つ緋梅を十歩離れたり

輪転機響く坂下十二月

私の感銘三句。深く被った網代笠の暗さの中の意外と澄んだ深まなざしが印象的。二句目、花を近寄って仔細に観察した時間があつたからこそ十歩の距離感。俳誌の印刷の馴染の印刷所だろうか。十二月から繁忙期の印刷所を思い浮かべるし、坂下ということで小さい規模のそれと思う。

子規俳句の魅力―初期の作品から (三)

沢木欣一

明治二十四年は子規開眼の年だが、その一年前に、

あた、かな雨がふるなり枯葎

という立派にできあがった句がある。この句など、もうすばつと決まった、初期らしからぬ出来栄の句である。この句をのけたら大した句はないといつていいかもしれない。

それで子規の句を見ていくと、翌二十五年から急にいい句が出てくる。

名月やすたゝありく芋畑

下駄箱の奥になきけりきりゝす

子規が根岸の子規庵に入つたのは、この年の春。まだ身体はそう悪くなく、あちこちに小旅行をしている。第一句は大磯で生まれた句で、实景に即して実感のよく出た句である。

第二句など、自分の身近なところに題材をとり、非常にわかりやすく、大変即物的な句である。下駄箱の奥で鳴いたこおろぎの音色に耳を傾けた。下駄箱の奥とは何とも卑近な題材である。この句、ものに即して、きわめ

て具体的なのがよい。即物的ということと、句を实景に得るといふこととはかわりがある。初期の即物的な句の代表の一つといつてよい。

この傾向は二十五年ごろから強くなり、写生を唱える一歩手前までいっているとみたい。明治二十六年の、

一籠の蜺にまじる根芹哉

は、大変即物的な、実際そのものの句。一つの籠に蜺が入っているという卑近な題材で、それに根芹、根のついた芹がまじっているという、ただそれだけのことだが、この句を読むと、具体的なありさま、そのものがはつきりと見え、感じられる句である。(中略)

今度子規の句集を改めて読み直して、こういう句こそ俳句の原型といつてもいいのではないかと痛感した。俳句の大ききとおさえ込んだ句で、決して古いことはない。この句、何でもなないことだが、しかし、これだけ正確にものをつかむことはなかなかできない。何か観念的に、頭で、俳句らしい情緒に合わせて作る人がいまだ多い。何かいい気分になりそうな言葉をもってきたりして俳句らしいものをつくってしまうことが多い。こういう印象明瞭な、すばつとした句はなかなかできないものである。

(次号につづく)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ⑪

橋本 清

家に来て 我が屋を見れば
玉床の 外に向きけり 妹が木枕 (二・二一六)

「家に帰って来て、自分たちが暮していた屋の内を見ると、寝床の上にあらぬ方を向いて転がっていたではないか、お前の木枕が。」

柿本人麻呂が妻を亡くした後に、「泣血哀慟して」(題詠) 詠んだ長歌に添えた短歌です。

主を失った枕。それが目に入った瞬間、もはや二度と使われることがないのだという悲痛な思いがこみ上げてきたのです。「玉床の外に向きけり」は見たままの情景で、「木枕」の様態に特別な意味はありません。葬送の際のどさくさで転がったままになっていたのです。それが何とも痛ましかった。「家」はホーム、「屋」はハウスの意。「玉床」は寝床の美称。「向きけり」のケリは、所謂「気づきのケリ」で、イデハナイカと訳すと実感が出るところ。

この歌は感動を呼び起こした具体物を提示しているだけです。その様態は描写しているけれど、感想めいた言葉はまじえていない。こんな歌は『万葉集』でも珍しく、『古今集』以後の歌の歴史の中で正岡子規が現れるまではほとんど見られないもの。

明治34年(1901) 4月28日、子規は夕食後、病床に

仰臥したまま、傍らの机の上の花瓶に活けられた藤の花を眺めているうちに、「あやしくも歌心なん催され」で、こんな歌を詠みました。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ
たたみの上にとどかざりけり (墨汁一滴)

これも花瓶に挿した藤の花房とただ提示しているだけです。短くて畳の上が届いていないと言って、その様態は描写しているけれど、それ自体に特別な意味はなく、そこからどんな思いを受け取るかは読む者の感性に委ねているわけです。ただ、正岡子規、すなわち、カリエスという死病にとりつかれた人物を一つの文脈として、その中の一首として読むなら、当時の彼の病状から考えて、来年の初夏にはもうそれが見られないかもしれないという、やるせない思いが潜んでいるものと受け取ることができるでしょう。子規は翌年の9月19日に亡くなりました。

人麻呂にしろ子規にしろ、その物が喚起した感動というのは、その時その場限りのものでした。どちらも何の変哲もない情景ですが、作者にとっては二度とめぐり会うことがない、一回性のものだった。それが読む者の胸を打つのです。小瓶をば机の上にのせたとど

まだまだ長ししら藤の花 (明治三十九年「萩之家歌集」)
子規とは同時代の落合直文の歌です。子規と似ているけれど、白藤の花の見事な咲きぶりを讃えることに重点が置かれています。すなわち、一期一会の体験が呼び起こす感動よりも雅趣の追求を重んじる、伝統的な歌の観念的性格を引きずっており、体験の一回性という切実さが感じられません。



犬の役目

東京 草間三香子

子供の頃の我が家は、茅葺屋根の囲炉裏の生活だった。鍵とは無縁の土間の門一つのみの典型的な日本家屋の生活だった。鍵の生活に慣れ親しんでよりの里帰りの折には、物音、風音にも目が覚めることが多く、夜間も門のみの実家の生活に鍵の必要性を痛感した。近年、実家も新築し、至る所に施錠箇所があるが、長年の習慣で相変わらず玄関と玄関回りのみの戸締りである。

車の普及により人の往来も激しく、最近では熊や猪の出没と、物騒な話を聞く。時代の流れと共に生活環境の変化により、どの家も鍵の生活が行き届いてきている。子供の頃の我家の鍵は、

よく吠える二匹の犬の役目だったようだ。

土間の門が懐かしくなると近くの古民家へ出向き、時間を忘れて遠き日に思いを馳せている。

あき兄

松戸 石川幸子

私が国民学校入学の頃、二階の子供部屋には勉強机が二台並んでいて、左は上の兄と姉の机、右は下の兄と私の机だった。この三歳上の兄は実に元気でよく遊びよく食べた。

ある時二階の屋根に登り出し、道向こうの家の人が、「危ない」と我が家に駆けこんだとか。我が家の近くの草深い湿地は、この兄たちの恰好の遊び場でした。私はよく兄の後について行ったが、手前でいつも帰されたので湿地の中の風景は知らない。

父は時々菓子を持ち帰った。子供らは平等に分けて貰い大喜びした。幼い私は必ず半分取って置き、二階の机の引出しの中に仕舞った。翌日いそいそ

と引出しを開けると、お菓子が無い。

犯人はあき兄、元気でよく食べる下の兄だった。私の引出しは鍵付きではなかった。鍵付きだったらと今でも思う。

鍵とキーホルダー

横浜 星野信子

40年ほど前の話です。

当時私は結婚式の日取りも、小さな一戸建ての新居も決まったある日、夫がキーホルダーに付けた鍵をくれました。キーホルダーはお世辞にも可愛いとか綺麗とかとは程遠い金色の紐を荒縄の様に編んだごつい物でした。しかし私はとても嬉しかった。何故なら私は実家暮らしで一度も家の鍵を持ったことが無かったからです。鍵穴に金ピカの鍵を入れて回す時の手に伝う響きに、ワクワクドキドキしながら何度も回した。楽しかった。そして若かった。

昨年引越して三度目の鍵をすっかり土色になった揃いのキーホルダーに付け。夫のは仏壇の抽斗へ、私ののはよく手に馴染んで今も頑張っています。

鍵についてのモノローグ

徳島 池田やすし

鍵の形は、昔から変わらならしい。用途は固く扉を開ぎし、財産を守る事だ。メタファーとしての鍵は、開かれるべきものが多い。記憶の鍵、心の鍵。俳句もまたそんな鍵に似ていると思う。自分の俳句を読み返せば、脳裏にしまわれた光景が開かれる。他者の俳句を読めば、俳句はその作者のひとりを知り知る鍵となる。

多くの俳句の世界を開いたのも俳句だった。まだ俳句に興味もなかったあの日、師匠せいきの俳句に出会った。この月のどこかにいくさはじまりし。その句に出会った瞬間、多くの世界が開かれた気がした。五七五と形を変えない俳句もまた、人が自然界の森羅万象を楽しむ鍵なのかもしれない。

鍵の思い出

静岡 長谷川秀子

「鍵」で思い出することは、私がまだ

小学生だった頃、仲の良い友人が自分の家の鍵をいつも持っていて、帰宅する時には自分で鍵を開けて家の中に入る姿がなんだかとても格好よく見えて、私も自分の鍵を持ちたいな等と思っていました。結局小学生の頃は一度もその希望はかないませんでした。

そして今私が「鍵」で強く思うことは、これまでの人生において「鍵」となる人物、キーパーソンが何人かいたということ。その方たちがいて今の私が生きていることが出来ます。本当に感謝の言葉しかありません。私がいただいた恩は私がまた他の方に送ってゆこうと思っています。

そんな「鍵」となる人物。人生のキーパーソンになりたいです。ありがとうございます。

蔵の鍵

敦賀 中川雅月

鍵といえ、蔵の鍵を思い出します。実家の蔵は勿論戦前の物ですが、多分三百年も続いていますので、江戸中期

の建物でしょうか。扉も二重で、外は20センチ位の漆喰、中は木製でそれに鍵が付いています。古鉄製船型錠です。ある時、兄の二男が悪さをし、兄嫁が烈火の如く怒り、蔵に閉じ込めてしまいました。そういうことが二度程ありましたが、その都度祖父である私の父が「そんな事をしたらいかん」と言っ、宇野重吉の如く、鍵を持って開けに行き難なく事なきを得ました。当時嫁入り前の私は何とかいいえそうなどたではらはらとして見ていました。今ではその甥も立派に成長し、事業を成功させています。

「万象ノオト」投稿募集

▽7月号「動物園」(3月末日締切)

▽8月号「パ」ン」(4月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

俳句

3月号
予告

2月24日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑧

特別作品 池田澄子・山口昭男・山西雅子

大 特 集

類想、自己模倣に 陥らない作句術

▽総論 類句・類想との向き合い方………本井英
「各論」似て非なるもの(切れ/抒情/私性ほか)
▽ここに注意——類句・類想、自己模倣の原因を探る
▽作句法 ▽私の自己更新

特集

昭和の俳句

座談会 高野ムツオ・西村和子・
野崎海芋・西村麒麟／「昭和
俳句史」川名大インタビューほか

六か月連続企画!

全国結社マップ vol.6 中国・四国・九州・沖縄

第12回 星野立子賞発表!

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

毎月25日発売
定価1000円(税込)

俳句界

2024年3月号

特集

名編集長ここにあり

○巻頭・俳誌の歴史 伊藤一郎

○編集長へのQ&A 伊藤一郎

「円虹」辻桂湖 「沖」辻美奈子

「銀化」潮田幸司 「銀漢」武田禪次

「古志」辻奈央子 「澤」望月とし江

「鷹」高柳克弘 「岳」小林貴子

「松の花」松尾清隆 「若竹」田口風子

「森の座」小川雪魚

グラビエ 俳句界NOW 田島和生

特別作品21句 石井いさお「燐星」

特集 俳句で町おこし

○松山市「俳句ポスト」 家藤正人

○荒川区「俳句のまち」宣言 対馬康子

○群馬 夢二忌俳句大会 木暮陶句郎

○俳聖・芭蕉による町おこし

*セレクション結社「窓の会」坪内稔典

私の一冊 松本勇二「虎杖」

佐高信の甘口で「ソニチハ」!

対談 日野美歌(演歌歌手)

「俳句界」投稿欄 一流選者13名!
日本一充実の投句欄



※一部変更の可能性あります。

株式会社文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com/>

万象作品

江見悦子・内海良太 共選



○は佳句に選ばれました。

しゆるしゆると昆布掻く音冬めけり 敦賀 為永香月枝

○初氷割つて乗り込む手漕ぎ舟

かずら橋渡り納めや山眠る

御取越仏具磨きのをなご衆

覚えなきすり傷ひとつ寒き夜 福岡 宮田千恵子

○山の精吸うて艶めく冬紅葉

三回忌冬青空のかがやきに

冬麗や小流れの音しやわしやわと

○長き夜は古き映画とサリンジャー 東京 松井宣夫

行人の足を早むる初北風

廃屋の庭に置かれし大火鉢

小春日^{北原白秋旧宅}や柴烟草舎に子等遊ぶ

○富太郎留守と書きあり冬うらら 焼津 小梁洋子

新刊書かかへて帰る落葉道

病む人や毛糸の帽子深深と

○また探すめがね勤労感謝の日 東京 高野翠子

数へ日や卓上に置く葛根湯

眉かくを忘れたる日や着ぶくれて

見当らぬ大事なメモや師走来る

冬の鳥朝の梢に声高く 横浜岡 元枝

枯蟪蛄這ひ上がりたる石の上

あかげらの洞より覗く目玉かな 札幌 竹重富子

○青青と箆笥の跡や畳替

しぐるるや虹の消えては現るる

降り注ぐ眩しき朝日冬の窓

通学路は枯木の枝のアーケード

竹挿せば妻が縄掛け雪囲 札幌谷 廣司

初時雨槌音一日なりやまず

薄れ日や瀬音の著き冬の川

○柳葉魚すだれ海風に揺れ銀の色

○這松の秀にうつすらと今朝の雪

残業の眼下きらめく聖樹かな

熱の子の頬の赤みや藪柑子

外にも行かず長椅子に着膨れて

ビードロのツリー煌く冬の市 札幌 石田 睦

初雪や轍を作るすべり止め

枯草を踏む音響く原始林

聖夜近し札幌一足先に白

忙しなく洞を出入り黄鵪鴒

夕暮の鴉忙しく日短し

海昏れて天に一刷毛冬茜 佐々木 茂

眠れぬ夜明くれば白き冬景色

○札幌黄てふ玉葱も入れ三平汁

レノン忌のイマジニ聴く夜息白し

友逝けり鰯引き摺つて来しことも

○店先に積まるる手帳年の暮

鳥渡る万の鶏埋る谷 島崎 洋

独りの夜ポインセチアの華やかに

七五三手を引く姉のすまし顔

寝つけぬ子空を見上ぐるクリスマス

手の型の軍手がぼつり道凍つる

餌を得て友呼ぶからす冬日和

サラブレッド嘶く牧野秋高し 園田 鶴子

光りつつ初雪宙に消えゆけり

土大根地べたに高く道の駅

○吹雪の夜強く抱きしむだきまくら

一羽たちあとは一斉池の鴨

潮鳴りの空に凝るや冬の星

和島良一

八代洋子

船橋明美

土門 一

土門 一平

田邊政代

竹重富子

終電の発ち寒灯の無人駅

喜雨を得て軽やかに落つ軒雫

東根

門脇好子

母の忌や厨にひそと萩の花

○野地蔵の足元染むる赤のまま

無花果を供へて父を偲びけり

大江

安藤桂花

秋の夜や堰を落ちゆく水の音

○白菜を両手に抱へ子の家へ

里囲む木の葉時雨の降り止まず

新庄

曾野部礼子

○竹箒にころころ遊ぶ竜の玉

万両の紅の斑の粒光る

神の留守宮にほまちの野菜畑

仙台

富田洋子

朴落葉して振り向ける山路かな

きゆつきゆつと新雪踏みて峠越え

冬うらら角のポストの紅光る

新潟

齋藤 信

足踏みを続けバス待つ今朝の冬

鉛筆の鉛色濃き霜夜かな

ほつこりと里の匂ひの餅雑炊

斎藤 ヨシ

地にふるる落葉の音や宮の朝

○身の丈越す紫苑四五本垣の端

雑炊に卵をときて独りの夜

榊原キヨ子

香り立つ柚子の薄皮きざむとき

○ほんのりと柚子の香りや仕舞風呂

植木屋の背のけぞらせ松手入れ

新潟

佐藤幸示

鬼芒高高とあるしにせ花鋪

紅葉せる八海山望むお斎の間

自転車セーター向ひ風受けて

凍道に靴底剥がれてしまひけり

山田季聰

山茶花や庭の雀のべちやくちやと

小春日や男の守りの肩車

燕

渡辺志ま

○潟舟に眠れる鴨や禁猟区

婆杉も年輪加へ山眠る

踏んでゆく登校途中の霜柱

芳賀

稲川清子

独り居や猫が布団にもぐり込み

茶の花に庭掃く埃かかりけり

泥団子の掌に掴みたり冬の蝶

福武幸子

一步づつ新蕎麦の列縮みたる

紅葉の山下りて来る時の鐘

鹿沼

渡辺利子

ころんでも泣かぬ幼や柿日和

○白式部の小粒くつきり雨上がり

菊活けて来客を待つ仏間かな

参道の両側に置く落葉籠 栃木 飯塚キミ

袖風呂に長き民話を語る

山の端の冬三日月のうすうすと

○不揃ひもよし小春日の手打蕎麦 つくば 藤原善明

ブラインドに銀杏散る影つぎつぎと

犬の子と小春の土手で戯るる

水槽に太る金魚や石路の花 佐野 木村君子

また一軒店を疊んで十二月 民謡の響く里 山天高し 志木 汐見克彦

ピラカンサ通ひ慣れたる茶屋の席

木枯にクレーンあまた唸りだし 老夫婦ぶつぶつ言うて師走入り

気に入りのバッグ繕ふ小春かな

山茶花の蕾の包む明日かな

下校の子冬夕焼の道来る 信号待つ登校の子の息白し

鯛焼の塩気の餡の甘さかな 年惜しむ免許返納迫る声

夕ぐれて山黒黒と柚子たわわ

冬帝に見染められたる左足 河豚ちりに老年の血の滾りけり

信号待つ登校の子の息白し

閔口かつ子

○庄司居の床板ぎしと冬初め

山茶花や薪の山積む休め窯 金色の鴨の羽撃き 鏝阿寺に

寒禽の弾くる朝の天満宮

○冬ぬくしドアの取つ手は益子焼 SLを埋めつくしたる落葉かな

日を弾きルビーの如き野ばらの実

冬帽の爺銀輪をゆつくりと ○世話人の障子張り替ふ正造居

○世話人の障子張り替ふ正造居

石路の花短き正造生家かな 小春空輪を描く 鳶見失ふ

小春空輪を描く鳶見失ふ

義本美智江 菰原美穂子

菰原美穂子

○紀の国の蜜柑山より瀬戸の海

○冬銀河チャック顎まで引き上げて

空へ放る銀杏落葉の金色に 成田 宮本うらら

冬夕焼白鷺映ゆる湖水の緋

冬青草荒行堂の水盤に 酒々井 小林あけみ

冬青草荒行堂の水盤に

小林あけみ

義本美智江

小林あけみ

豆柿や古書店跡に実りたる
バラストの錆に浸み込む冬の雨
ブロッコリー今年限りの畑なり

佐倉

新谷八郎

ねんごろに読む姪のふみ小夜時雨
三尺の竹馬に乗る傘寿かな
挽ぎたての柿をいただく句会かな

有泉正夫

冬空に槌音高く響きけり
銭湯に百までかぞへ冬銀河

杉田富美代

北窓を塞ぎ戸を締め我が居場所
母の手の温み綿入懐しき
故郷の海に愈愈寒波来る
朴落葉地に還るとき地の色に
水尖る音や真冬の水琴窟

鈴木隆久

○雪吊の縄目の締る雨の後

鈴木美根子

落葉舞ふ一瞬甘き匂ひかな
靴下の小指繕ふ夜なべかな
冬晴や下校放送よく聞え
常陸路の木洩れ日眩し小六月
石碑背に温みを放つ石路の花
吊し柿障子に影を落しけり

立原千代子

釣瓶落しこれでおしまひ庭仕事
十三夜コンサート終へ空仰ぐ
草笛やさみしい時のなぐさめに

佐倉

米田敏子

黒黒と荒行堂の根柢かな

船橋

入河 大

茅屋根や銀杏黄葉の散り敷きぬ

振り向けば楓紅葉の日の光

○一の酉帰りにくぐる縄暖簾

槐島 修

警策の音して坐禅冬の朝

寒林や幽かにとどく工事音

届きたる何光年や冬銀河

山口秀吉

風船爆弾作りし郷や櫨紅葉

新米や米穀通帳今は死語

山並の晴れゆく朝や冬の鶯

柏

鹿毛満子

鉄塔の川面にゆれて小春かな

安達太良の尾根光りたる雪の晴

風鎮のこつんと尖り冬に入る

村田由美子

どんぐりの絨毯堅し日の柔ら

○出荷待つ葉牡丹あまた育苗圃

○ジャングルム少年さつと脱ぐジャケツ

松戸

石川幸子

築山を又ふくらます枯葉かな

水彩の絶筆となり寒椿

のぼさんの野球場とや落葉踏む

松戸

菊岡緋路

七五三砂利にぼつくり小股なる
もみづれる楓の葉半分落ちにけり

宝物館いでて光の黄葉かな

寿多映子

屋敷神傾くままや石路の花

水浴びの小鳥の揺す落葉かな

ふんはりと銀杏落葉の踏みごこち

中森ひろえ

水飲み場のしぶきにはづむ花八手
柊の花の香たどり歩みゆく

野田成夫

○二世帯の表札つなぐ薦もみぢ

駅弁の底の温みや茸飯

渡部洋子

吟行の果てて余韻の十三夜

水替ふる冬菊の香の淡きかな

冬茜はるか地平に黒き富士

市川

奥澤よし江

山眠る歴史遥かに八ッ場ダム

清流の音を近くに掛大根

継ぎ接ぎの布を合せる冬日和
髪染むるのみで終りぬ日短

東京

安藤美酒々

やはらかに一樹満開冬桜

石路咲くや松の廊下の跡迎り

武蔵野の枯葉に追はれカフェまで

東京

石山風童

夜明けて掠鳥よぎる畑の上

森ぬけてショートステイや冬近き

水底に白くしづもる朴落葉

一由久美子

○手に馴染む藍の大皿冬ぬくし

一病の母に吉野の葛湯吹く

晩秋の満月突き刺すスカイツリー

大場八朗

底冷えや首にタオルを巻ける朝

新米をとどけし君も九十歳

との曇る空にちりばめ冬桜

北口富栄

○薦枯るる間口の狭き骨董屋

乗り継ぎの鎌倉詣冬日和

秋の朝声明渡る阿弥陀堂

齊藤孝夫

此処彼処なる紅葉の競ひ合ひ

ひと休み行人坂を渡り鳥

壊さるる雪見障子のありし家

鶴田智美

顔見世や千本桜の花吹雪

物影にかくれて一花冬椿

雪吊の空美しき浜離宮 東京 中澤桃子

小春日の電線占むる鴉かな

冬空へ音響かせて一機行く
鳶色の母の手袋虫喰ひて 府中 竹村晃子

○白臬能面のごと動かざる

柿色の夕日に染る渡り鳥

鳥渡り空つばの空暮れ残る 平子甲奈

雲間より初冠雪の浅間かな

渡り鳥一羽遅れて富士の裾
落葉舞ひ通学生 of 肩に落つ 国分寺 中ノあさ子

峠吹く風にセピアの芒揺れ

掘りあげし諸人居者の笑顔かな

木枯に背中押さるる帰り道 前川 昇

クリスマス of 歌声響く音楽堂
雪しんしん欄間の里 of 鑿の音 日野 松原悦子

○ストープの匂ひなつかし実家かな

ロケット立つ学園都市や神の旅

児童らの甘藷掘る笑顔かな

番鴨水尾 of 扇の重なりて

凧や缶けりの音響く路地 松本幸男

母の香や魚 of 粗の根深汁 松原悦子

帰り花窓に少女 of 影一つ

有磯海鰯豊漁 of 宿の鍋

冬夕焼富士 of 稜線際立てり

懸大根夕日 of 帯の届く浜

紺碧 of 空や一樹 of 銀杏散る 宮崎正義

紅白 of 水引 of 咲く和菓子店 青梅 横井一美

○霜月や朝 of まだきに白き月

強風やビルの床にも柿紅葉

冬木立琥珀色なす夕間暮れ

空晴れて大にぎはひや蔵開

秋蝶 of 飽かず訪ふ母子 of 庭 調布 荒井 仁

老木 of 桜に一輪帰り花 横浜 大駒泰子

和紙 of 里山裾うづめ秋海棠

ポケットに手袋遺る形身分け

草の花かひなゆたかにマリア像

シベリアを手土産にして小春かな

烏瓜一つ下りて藪明し 三鷹 南場雅子

○日の出づる場所 of 変りて冬立てり 加藤和子

赤き実 of 柘榴は丸し空青し

暮れそめて冬三日月の屋根照す

庭隅の零余子ほろほろ散りはじめ

白壁にうだつの家並柿熟るる

冬霧の谷越えて行く隠れ里

葛橋揺れて急流冬紅葉

ごひいきに社長のくばる団扇かな

老鶯の声林より抜け来る

畑一面腰の高さの草むしる

青空へ残る紅葉の艶けり

大根の味良く浸みて鰯大根

菊咲いて庭先香る 一処

豊作へうねりとなりて雀どち

雨し吹き蹴出し鮮やか阿波踊

鬼灯を鳴らす乙女や浅草寺

一頻り鴉の鳴いて冬に入る

目薬の一滴紅葉あざやかに

鈍色の鉄瓶磨く暮の秋

施餓鬼会の天蓋揺す大太鼓

虫の音の聞えぬ今宵風荒し

笹鮎の白磁の皿に酢の香り

横浜 坂本具子

柴田雅春

鈴木律子

長野高朋

星野信子

豊 美佐子

羅の僧衣の袖に数珠ゆるる 横浜 豊 美佐子

満月やポプラ二本の長き影

風荒し鬼の子視界横切れる

○十二月未だ片目の達磨かな 川崎 横山ユキ子

大鉢に葉牡丹植ゑて安堵せり

ビルの陰明るく枇杷の花盛る

一枰は猫の出入りや障子貼る 茅ヶ崎 久保田富士子

ざつくりと掃くや落葉の匂ひたつ

○色濃きは葉としたり散紅葉 伊勢原 山本カツ子

亀虫の貼りつく窓や夕明り

門覆ふ幹のくねりや新松子

霜除けの笹の乾きや土匂ふ

冬日向丸まつて切る足の爪 松田 古谷悠紀子

二メートルの高みの柚子を挽ぐ鋏

一息に消ゆる残照冬落暉 静岡 飯田優子

師の背の鞆にとまる雪螢

冬川に雲を映せるひとところ

切株の割れ目に生ゆる冬紅葉

冷まじや楠の太根は岩を抱き 伊東文恵

店仕舞ひの裸電球暮の秋

日を吸うて垣に連なる実南天
冬に入る柏手響く大鳥居

静岡

海野俊彦

刈田道つがひの鴉退きもせず

退院の父の向へる大根引

霜除けの藁を足したり風夕べ

杉田義則

○小屋閉づる金槌の音冬となり

退院の荷物は四つ夜半の月

銀杏散る廃校決る校庭に

高橋一夫

足音に岸を離るる鴨の群れ

冬の園男の膝に猫ねまる

歳時記を捲る吟行文化の日

田中秀幸

踏まれたる銀杏臭ふ駿府城

○波音の同じ音なし秋の暮

母の忌に母の好物新小豆

筑地裕子

虫嫌ひの子のスカートに蟻蛸とぶ

友よりの栗茸鍋や二人の餉

休日のパン屋の庭に石叩

内藤允昭

鎌鍬を納め豊年まつりかな

秋空を矩形に分くるビルの街

鳥居抜け山吹二つ返り花

永田公香

山茶花や護符の貼らるる長屋門

石路咲くや万葉古道に子らの声

波際に恋人たちの日永かな

静岡

長谷川秀子

きらきらと葉に降る雨や雛祭

雨音をふんはり包む桃の花

○冬日射す船渠の底の水たまり

小春日や四肢伸ばしたる陸の亀

紺青のペリーーの浦に鷹舞へり

松永博子

千両や水音高き修験寺

矢野喜久江

喫茶店ポインセチアの溢れをり

北風や帽子と走る交差点

散紅葉打ちたる雨に色褪せず

掛川

鈴木美由紀

冬ぬくし雀出入りの庭木かな

一つ星冬夕焼に迎へられ

立ち話晩秋の日の落ちにけり

川根

鈴木裕一

庭駆くる子らに小春の風柔し

捨て案山子畦に夕日を見てゐたり

天の川句友の別れ突然に

金沢

北野陽子

ハンドベル木枯吹いてひびきけり

犀川の坂道登り帰り花

小春日の吸はるるやうな青き空

金沢

新出祐子

秋日和アルパカ跳ねて餌待てり

寒雀の羽毛ふつくら今朝の庭
花柵鬼門に淡き匂ひかな

敦賀

川口和代

柚子味噌のレシビ聞きつつ太極拳

○さるほほへ木枯一号飛驒の里

影長き石の彫刻小春空

田上ナツ子

凧や声舞ふ神事せんべい焼

山本一枝

夕千鳥渚の藻屑つつき合ふ

義士まつり墓に赤穂の塩供ふ

山本一枝

日溜りの庭の隅っこ冬すみれ

盃洗といふもの見つけ寒の蔵

山本一枝

○梅檀の実の金色に房なせる

廣田宏美

寒空に友を探すやひとつ星

山本一枝

居待月の片方に添へる一つ星

椅子朽ちて紅葉かつ散る札所寺

徳島

林 早苗

野菊咲く辺や魚霊碑に手を合す

おさな児の頬に紅さす七五三

山本晴美

むれ蜻蛉翅と水面の照り合へる

松田好子

靴紐を締めて冬至の街へ出る

山本晴美

大らかな良弁の自署冬ぬくし

○どんぐり五つベンチの隅に見つたり

山本晴美

黒猫の光る眼よぎり鯉起し

宮崎恵美

柿実り己が重さに垂れ下る

山本晴美

肅肅と沓音つづく秋の宮

宮崎恵美

溜池に釣糸垂す小春風

山本瑤子

笙の笛戦死の父も霧の中

宮崎恵美

いろは紅葉日差し留めてなほ紅く

山本瑤子

突風に乗りにて落葉の走り来る

朝倉みゆき

鷹渡る蒲生田岬の空高く

山本瑤子

杜に雪格天井へ続く道

白山

朝倉みゆき

余所行きの顔をする子や七五三

山本瑤子

被布着せし子の子や早も十三歳

朝倉みゆき

すつぽんの化石小春の博物館

小松島

田上幸子

○雪吊の掛け声響く空青し

鶴尾正江

○山頂に風の道あり石路の花

山本瑤子

夕暮れて明かり差したる石路の花

鶴尾正江

建て替り冬日あふるる駅舎かな

福岡

相本和子

うたた寝の炬燵よろしき旅心

鶴尾正江

まぎれをり銀杏落葉に鳥の羽

福岡

相本和子

冬晴や運転免許返納し
亡き母の襟巻あはき桃の色
冬に入る更地に残る石の亀 福岡 園田清子
大根の皮のきんぴら山の晴
十五人始め静かに忘年会
百段を登り切つたる小春空 那珂川 高山ひさ子
蒸し立てのいきなり団子冬隣
寝たきりの祖父に甘木の葛湯かな
剥きくれし牡蠣にリキュール雨の浜 ベルシ 森尾 舞
冬近し腹巻き柄のホルスタイン
あまだれの桶打つ音や初時雨

お詫びと訂正

2月号掲載の赤堀洋子様の「同人特別作品」に誤りがありました。お詫びして訂正致します。

誤 鶴の羽搏ち
正 鴨の羽搏ち

「2月は「万象俳句会会費」の「納入月」です」

「理解と」協力を宜しくお願い申し上げます。

① 万象俳句会の会計年度は、4月1日～翌年3月31日です。
② 振込用紙は、毎年万象誌2月号に挿入しています。

振込用紙を紛失された場合は、郵便局備付けの振込用紙をご利用下さい。

③ 振込みは郵便局窓口、又はATMからお願ひ致します。
④ 振込み締切日は2月末日です。2月末日までに振込みをお願い致します。

⑤ 振込先は、郵貯振替口座番号【00230-0-103581】
口座名【万象俳句会】です。

⑥ 会費は、前納制で1年分をまとめて振込み願ひます。
⑦ 金額は、

一般会員 12,000円です。

同人会員 24,000円と同人会会費5,000円の
合計29,000円です。

⑧ 振込み頂いた会費は、原則として返金致しません。

⑨ 振込み用紙の半券（控）を「領収書」と致しますので、
大切に保管願ひます。

⑩ 振込手数料は「ご本人」負担をお願いしております。

⑪ 同人会会費（5,000円）は、後日、同人会会計口座へ纏めて振替えます。

万象俳句会 会計担当 松浦 陵保
万象同人会 会計担当 大久保 進

万象作品の佳句

内海良太

初氷割つて乗り込む手漕ぎ舟 敦賀 為永香月枝

去年の日本列島は夏の異常な暑さを経て、12月になってやっと例年通りの気温になってきた。初氷を割って進む手漕ぎ舟は敦賀近辺の湖沼での囑目。以前、余呉湖で藻刈の手漕ぎ舟を見たことがある。巧みに舟を操作する光景にしばらく見とれていたのを思い出した。

山の精吸うて艶めく冬紅葉 福岡 宮田千恵子

あたりが枯れ色を深める中、尚くれないの色を止めている冬紅葉はひとときは鮮やか。何か神の手が加わっているのではないかと思うほどである。日本は山の威力を常に重視してきた国。この句も山の精を賜ったという感じ。

長き夜は古き映画とサリンジャー 東京 松井宣夫

秋の夜長にはじっくり腰を据えて古い名画を観たり、読みたいと思っていた小説を読んだりするのもいい。

松井さんは原文でアメリカのJ・D・サリンジャーの小説を読んだのだろう。私は古本の村上春樹訳、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』の初めの辺りに、葉を挟んだままになっている。

富太郎留守と書きあり冬うらら 焼津 小梁洋子

富太郎は植物学者の牧野富太郎博士。資料館を見学に訪れたとき、再現した研究室の黒板に「只今留守」と書いてあった。宮沢賢治宅の軒下の黒板に「下ノ畑ニ居リマス 賢治」とあるのと同じで、書き手の人柄が偲ばれる。

また探すめがね勤勞感謝の日 東京 高野翠子

近視の人が高齢になるに従い、ピントの具合で眼鏡無しでも見えるようになってくる。こうなると眼鏡の扱いがやや大雑把になってきて置き忘れが多くなり、いつも探している状態となる。

多分、高野さんだけではなく、皆さんも同じ経験をされていると思う。

青青と筆筒の跡や畳替 横浜 岡 元枝

「畳替」の季語は年末の年用意の一つとしての本意があるという。本意は本意で理解することにして、畳替えは四季を通じて行われる。畳屋が来て古畳を外した時に筆筒の跡が残っていたという。前回替えたのは何年前か、その時の畳の青さが新しいままだという感慨。

這松の秀にうつすらと今朝の雪 札幌 谷 廣司

這松は高山帯に生える常緑の低木。本州では立山の這松に育つ雷鳥の写真をよく見掛ける。谷さんは植木の専門家、自宅で這松を育てているのだろう。今冬の初雪にいいよ冬との思いで這松の雪を見詰めている。

これより三句入選からの佳句

札幌黄^{さっぽろき}てふ玉葱も入れ三平汁 札幌 佐々木 茂

三平汁は北海道の代表的な郷土料理の一つ。鯨または塩鮭と、大きめに切った野菜をたっぷり入れて炊く惣菜風の料理。一句はこれに「札幌黄」という人気の新種の玉葱を入れ、新しい味の追求といったところだろう。俳句の新しみの追求にも似ている。

白菜を両手に抱へ子の家へ 大正 安藤 桂花

安藤さんの畑で収穫した白菜、今年は出来が良い。白菜は野菜の王様、漬物にもなんの料理にも合う。近くの子の家は地続き、畑伝いに白菜を抱えて届けたのだろう。子にとって親は有難い。

身の丈越す紫苑四五本垣の端 新潟 斎藤ヨシ

「紫苑」は「万葉集」にも古くから詠われている花。地下茎から毎年数が増えてゆき、時には身の丈を越すほどに伸びることもある。句には作者の愛おしくものを見る目と、小さな驚きを感じられる。毎年楽しみにしている花なのだろう。

白式部の小粒くつきり雨上がり 鹿沼 渡辺 利子

歳時記には「紫式部」の副題として「白式部」が載っている。紫種に対して白果種を白式部といっているようだ。白式部の小さな丸い実が群がっている姿は美しい。殊に雨上がりの式部の実の「くつきり」に実感がある。

庄司居の床板ぎしと冬初め 佐野 関口かつ子

冬ぬくしドアの取っ手は益子焼 佐野 仲山さよ子

両句とも栃木県益子の陶芸家濱田庄司の記念館と旧居を訪れたときの句。

一句目、濱田庄司旧居での囑目。古い板の間を摺り足で歩いている時、不意に静寂を破る「ぎし」という音。古い民家にはありがちな音、緊張感が増す。

二句目、ドアの取っ手までも益子焼。さすが陶の里の益子と驚いたり感心したりしている。

世話人の障子張り替ふ正造居 佐野 菰原美穂子
田中正造の生家だろう。田中正造はご存知の通り足尾銅山の鉱毒事件に真正面から取り組んだ人。

二階建ての生家は現在の佐野市小中町にあり、「小中農協倶楽部」が障子の張り替え等、維持管理しているという。

一般公開もされて見学者が多く訪れ、旧居には当時の農家の暮らしぶりを垣間見ることが出来る。

ストーブの匂ひなつかし実家かな 東京 前川 昇
母の香や魚の粗の根深汁 日野 松原悦子

両句とも人の五感の嗅覚を生かした句。

一句目、久々に帰郷したときの実家の匂い。家にはそれぞれ、住人の生活様式からの匂いがあるものだが、ストーブの匂いは決定的だろう。前川さんの実家は薪ストーブ。木の匂いはいい。身体全体がリラックス出来る。

二句目、根深汁は葱を具にした味噌汁のことを言う。お母さんは魚の粗をダシに取ったの根深汁が得意だった。ぶつ切りにした葱をあまり煮すぎないようにして食べれば最高。葱の芳香と味噌と魚の香りがマッチして、すこぶる美味。これが母の香りである。

新中央句会報 (12月例会)

令和5年12月24日(日) 東京文化会館

(出席29名)

江見 悦子 主宰選

冬の雨あがりし後の日矢とがる	田 中 道 江
一頁破りし跡や古日記	中 村 千 久
年の瀬のあれやこれやの揭示板	大 久 保 進
朴落葉踏みてふはりと日の匂ひ	下 嶽 孝 一
詰め合うて屋台膨るる薬食	内 海 良 太
白鳥来八海山の高みより	中 村 千 久
白鳥の夕日を羽にたたみけり	榎 本 文 代
銀の枝張る桜冬芽かな	沢 辺 た け し
甲板を磨く椰子の実冬うらら	一 由 久 美 子
東京タワー渾身の灯の十二月	久 保 村 淑 子
おほかたは妻の書込み古暦	大 久 保 進
ピアノ鳴る佐助垣の離れより	内 海 良 太
国境の無き島々へ鳥渡る	塗 木 翠 雲

④ 国境の無き島々へ鳥渡る 塗木翠雲
 渡り鳥には、春に日本に来て秋に帰る夏鳥と、秋に来て春に帰る冬鳥があるが、季語としての渡り鳥は秋に来る冬鳥のこと。よく知られている鳥が鴨、雁、白鳥など。

「国境の無き島々」に作者の思いが籠る。鳥は自由にどこへでも渡ってゆく。かつては人間も鳥と同様に国境など持たなかった。領土を巡って争っている現在の世界情勢を憂えている作者。「島々」に生きる人々の生活も想像できよう。「島々」は辞書に従い「島島」と表記したい。

冬の雨あがりし後の日矢とがる 田 中 道 江
 「冬の雨」は冷たくて音もなく細かに降ることが多く、暗く寒い印象も付きまとう、と歳時記にある。その雨があがつて射してきた日を「日矢とがる」と表現した。思いがけず強い日差しに、自然に対する作者の気づきと驚きがある。

東京タワー渾身の灯の十二月 久保村淑子
 スカイツリーが登場しても、東京のシンボルとして東京タワーの魅力は衰えてはおらず、その姿の美しさは他の追従を許さない。日没から点灯されるライトアップは夏と冬で色彩を変え、時にイベントを祝うライトアップも話題をさらう。年の終わりの十二月、夜空を輝かせる灯は、巨大都市東京を照らして美しい。「渾身の灯」は、一年間を精一杯働いた人々との連帯を感じさせる。

内海 良太 名誉主宰選

年の瀬のあれやこれやの揭示板 大久保 進
 心地良きオーバーコートの重さかな 内 田 郁 代
 ジャズの音と薬罐湯気立つカフェの夜 松 井 宣 夫
 雪ばんば金魚の池に見失ふ 江 見 悦 子

美女眠る姿の山や深雪晴

三屋英俊

昏き目の幼にも来よクリスマス

内田郁代

暫の大見得切るや羽子板市

長谷川信也

口切や仕立て直しの御召し着て

久留島規子

甲板を磨く椰子の実冬うらら

一由久美子

電飾よりすすきり冬の星が好き

安藤美酒々

宍道湖を見下ろす天守冬日和

小池清晴

おほかたは妻の書き込み古暦

大久保進

④木の匙の先に重たき葛湯かな

三木豊子

⑤木の匙の先に重たき葛湯かな

三木豊子

葛の根から採る漢方薬の葛根湯や葛粉は馴染み深い。葛粉にほどよく砂糖を入れて水で溶いた後、熱湯を注いでかき混ぜると、透き通って糊のようになる。これが葛湯。掲句は、かき混ぜて固まってきたときの匙の先に重さを感じたもの。誰でも経験したことだが、匙先の感覚を言ったのが珍しい。

心地良きオーバーコートの重さかな

内田郁代

近頃の冬はダウンコートや厚手でも軽いオーバーコートが主流のようだが、見るからに厚手で重そうなクラシックな感じのものもある。作者は重くないと着た心地がしないという。掛け布団は重い方がよいというのと同じ。

美女眠る姿の山や深雪晴 三屋英俊

大雪の後の快晴になった山の姿だろう。なだらかな稜線を持つ雪山は美しい。越中の立山に比べ、加賀の白山は美女が

眠るような姿というのが分かる。

中村 千久選

空いてゐる優先席に冬日かな
詰め合うて屋台膨るる葉喰
冬晴の富士を遠くに風見鶏
白鳥の夕日を羽にたたみけり
シヤンパンの泡途切れなく聖夜かな
甲板を磨く椰子の実冬うらら
数へ日の床屋の椅子に眠りけり
人の輪の中より聖歌辻楽士
宍道湖を見下ろす天守冬日和
烏瓜垂る武蔵野の高架線
ピアノ鳴る佐助垣の離れより
おほかたは妻の書き込み古暦
④植木屋の素手雪吊の縄しごく
江見悦子

⑤植木屋の素手雪吊の縄しごく 江見悦子
第二句集「砂時計」にも句またがりの句を随所に見せている作者。掲句も「植木屋の素手」と、軍手などをはめずに作業する職人の手に着目した。ごつとつとした手が、「雪吊」のための荒縄を黙々としごいているのである。まさに即物具象の写生の句。

甲板を磨く椰子の実冬うらら 一由久美子

1月号で巻頭となった絶好調の作者の句。「椰子の実」を割ったその断面で、海水を流した甲板を磨き上げていく。デッキブラシの代用である。船員が腰を落として掛け声を掛けながらの作業。ピカピカになった甲板に冬日差が光る。「冬うらら」である。

ピアノ鳴る侘助垣の離れより 内海良太

椿よりも小ぶりで気品があり、茶人にも好まれたという「侘助」。その垣根のある庭の離れから、ピアノを弾く音が聞こえたという。閑寂な佇まいと、そこに響く洋楽器の音というミスマッチがおもしろい。どんな人が、どんな曲を弾いていたのだろう。

榎本 文代 選

クリスマス肩章赤き船医服 一由久美子

朴落葉踏みてふはりと日の匂ひ 下嶽孝一

詰め合うて屋台膨るる葉喰 内海良太

ドリツプの泡や聖菓はうすく切る 内田郁代

駅の前聖夜飾は農学部 桔梗 純

田の隅の土管に消ゆる鼯かな 奥 太雅

口切や仕立て直しの御召し着て 久留島規子

甲板を磨く椰子の実冬うらら 一由久美子

数へ日の床屋の椅子に眠りけり 塗木翠雲

風花や神楽太鼓の音遙か 小池清晴

ピアノ鳴る侘助垣の離れより 内海良太

④ 一陽来復海図机の広広と 一由久美子

⑤ 一陽来復海図机の広広と 一由久美子

横浜で日本丸を見学されたようである。船内を巡ると、大きな机には航海のための地図が広げられていた。たまたま冬至の日のこと。この日を境に日が長くなることから「一陽来復」とも称する。寒さが厳しい中にも、一日一日と日が伸びてゆく明るい季節感を持つ。古い海図からも、航海への昂りや緊張が伝わってきたようである。

朴落葉踏みてふはりと日の匂ひ 下嶽孝一

朴の葉は、昔は食べ物を包んだほど大きい。枯葉を踏むとびっくりするほど大きな音を立てるが、作者はあたたかい日溜りの匂いを感じとった。「ふはりと」が絶妙。

数へ日の床屋の椅子に眠りけり 塗木翠雲

新年はさっぱりとした気持ちで迎えたいもの。床屋で髪を刈り、髭を剃ってもらっているうちに、ついうとうととしてしまった。多忙な年末のひととき、「眠りけり」に俳諧味がこもる。

今後の新中央句会の予定

▽3月24日(日) 東京文化会館 大会議室 13時より

▽4月28日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

続・続・令和の新創刊

特集

「あかり」「ASYL」「あふり」
「亜流里」「麒麟」「ことごと句」
「さら」「雫」「青麗」「雪天」「像」
「月の森」「初桜」「風信」「三日月」

☆巻頭三句

津川絵理子

古賀しぐれ

谷口智行

加藤耕子

二川茂徳

西池みどり

☆今月の華

遠藤由樹子

山口昭男

☆俳句と短歌の10作選歌

千葉皓史

日高堯子

「対岸」吟行記

今瀬一博

☆好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り 俳人の四季

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

―古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

諸家書架

二ノ宮一雄

一望百里



Haiku Shiki

2024年3月号

2月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

万象基金のご報告

佐藤 嘉洋 様	四口
江見 悦子 様	一五口
山本 右近 様	一〇口
榎本 文代 様	一〇・五口
柳澤 宗正 様	二・五口

(令和6年1月1日～1月31日・受付順)

「万象」の発展のため、大切にに使わせて頂きます。

万象俳句会

「万象」誌の遅配について

前号でもお知らせ致しましたが、印刷所からの発送方法が変更になった影響を受け、既にくつかの遅配の連絡を受けております。今後は翌月初めのお届けとなることもあるかもしれませんが、心配をしておりますが、発送名簿に基づいて作業を進めておりますので、到着をお待ち願います。

大幅に遅れた場合には、別便にてお届け致しますので、発行所までご一報いただければ幸いです。

北から南から

布施弁天とあけぼの山農業公園

千葉 穂苅照子

私が住んでいた柏市には、布施の弁天様として親しまれ、初詣にも人気の寺院がある。正式には紅龍山布施弁天東海寺と称し、大同2年（807）に弘法大師作と言われる弁天像をご本尊（現在秘仏）として開山された祈願寺である。江島神社弁天堂、浅草寺弁天堂とともに関東三弁天と言われている。本堂は唐風の向拝を持つ三方破風造りで、総朱塗り、外陣天井鏡板の竜は狩野探舟作である。戦火により焼失したが諸大名の寄進により享保2年（1717）に現本堂が完成した。楼門は総櫓三階建の棧瓦葺で階下に四天王。階上に釈迦三尊が安置されている。鐘楼は全国でも珍しい多宝塔式の総櫓造りで、みかげ石積八角形の基壇の上に十二本の円柱があり、その柱頭に十二支の彫刻を配し方位を表している。本堂、楼門、鐘楼はそれぞれ千葉県の重要文化財に指定されている。高台の境内は、それほど広くはないが、広大な田園風景に囲まれ、眼下には雄大な利根川が流れ、真正面には筑波山が見えるビュースポットである。

布施弁天と隣接して、あけぼの山農業公園がある。この公園はどの季節に訪ねても色々な花を見ることが出来て緑豊かである。風車のある広大な花畑は季節によって花が変わる。春はチューリップ、ポピー、夏は向日葵、秋はコスモス、冬はパンジーに彩られ、風車をバックに撮る人気のフォトスポット

ットとなっている。風車の側には睡蓮と古代蓮の小さな池もある。花畑を見下ろすようにさくら山がある。さくら山は桜の名所として有名で、花見のシーズンにはたくさんの人で混み合う。春の桜だけではなく十月桜も多く植えられている。このさくら山には一茶の句碑が立っている。

米蒔くも罪ぞよ鶏がけ合ぞよ

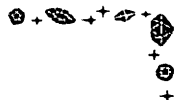
何ともユーモラスな句である。夏はさくら山の斜面が狐の剃刀に染まり、秋はさくら山の横の竹林から梅園へと続く斜面が彼岸花に染まる。風車の花畑横の芝生広場には八朔相撲の土俵があり、地域の小学生による相撲大会が行われている。布施弁天側には池泉回遊式の日本庭園があり、茶室柏泉亭がある。句会等にも利用することが出来、コロナ禍前に柏句会でも吟行会を行ったことがある。

脇往還揃ひ出でたる春の花
利根川の風に嘯りはじまれり
芽柳や淡き二峰の筑波山
山門の大きくひらき春寒し
蹲踞に春のリズムの水はぬる

とく江
京子
たけし
満子
照子



ルビーの小函 (3月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 7 上 冷まじ (すさまじ)
鋤 (やじり)
手水舎 (ちょうずや)
笥 (かけい)
葉ゆる (ひこぼゆる)
- 8 下 銀 (しろがね)
桴 (ばち)
- 9 上 黙 (もだ)
鮮しく (あたらしく)
- 9 下 小晦日 (こつごもり)
- 12 下 桃 (こうじ)
- 13 上 末枯る (うらがるる)
輓馬 (ばんば)
- 13 下 突ばかり (とっぱかり)
- 14 上 鉞力如露 (ぶりきじょう)
- 15 下 縹 (はなだ)
狹庭 (さにわ)
- 17 下 和願施心施 (わがんせ・しんせ)
- 18 下 魼 (えり)
杷 (さらい・えぶり)
- 19 下 弟子屈 (てしかが)
- 20 上 陵 (みささぎ)
飯桐の実 (いいぎりのみ)
格天井 (ごうてんじょう)
- 22 上 木乃伊 (ミイラ)
- 22 下 流行言葉 (はやりことば)
- 23 上 著し (しるし)
- 24 下 襜褕 (どてら)
- 25 上 熔岩 (ラバ・ようがん)
- 25 下 烏骨鶏 (うこっけい)
- 26 上 妣 (はは)
- 26 下 榧 (かや)

- 27 下 絢へり (なえり)
- 28 上 彼方此方 (かなたこなた)
在す (おわす)
若冲 (じゃくちゅう)
*伊藤若冲・江戸時代の絵師
- 岸駒 (がんく)
*佐伯岸駒・江戸時代の絵師
- 29 上 大旦 (おおあした)
- 29 下 夕星 (ゆうづつ)
- 30 下 自若 (じじゃく)
- 31 上 腓 (こむら)
裘 (かわごろも)
- 37 上 揺なく (ゆるぎなく)
雁 (かりがね)
石工 (いしく)
- 47 下 紫烟草舎 (しえんそうしゃ)
- 48 上 秀 (ほ)
- 48 下 凝る (こごる)
- 49 下 お斎 (おとき)
- 50 上 鏝阿寺 (ばんなじ)
- 50 下 詣ずる (そらんずる)
- 51 下 根柢 (ねぼだ)
安達太良 (あだたら)
- 52 下 声明 (しょうみょう)
- 53 上 甘藷 (さつまいも)
訪ふ (おとなう)
- 53 下 番鴨 (つがいがも)
- 54 上 鼈けり (つやめけり)
- 55 上 栗耳 (くりたけ)
- 55 下 船渠 (せんきょ・ドック)
- 56 上 片方 (かたえ)
良弁 (ろうべん) *奈良時代の僧

北 南 西 東

消 息 等

内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句

〔風港〕 1月号に

現世は暑し大仏胸はだく 良太

人去りて更地一面草の花 悦子

〔くちら〕 1月号に

木簡の太き米の字秋高し 良太

切り岸は南部赤松こめ帰る 悦子

〔たかな〕 12月号に

水底を行きたる心地サングラス 悦子

〔たかな〕 1月号に

沖はるかより夏潮のうねりかな 悦子

〔初蝶〕 1月号に

夜は秋の仮面の眼窩がらんどろ 悦子

第30回俳人協会俳句大賞入選

鈴木太郎・中西夕紀選

炎帝より徘徊の母とりもどす 大内和憲

全応募作品五九三七句の中から人選された。

おめでとうございます。

茨城県龍ヶ崎市の「龍ヶ崎市立中央図書館

俳句入門講座」を終えて

縁があつて昨年度から、年6回の入門講

座の講師を「万象」が務めている。昨年度

は江見悦子主宰が、今年度は内田郁代さん

が行った。来年度も継続予定。

月一回、半年の講座を終えた。回を追うごとに、参加者の眼差しがきらきら輝いてきた。「良い講座でした」と館長さんに言つて頂き、ほつとしてゐる。(内田郁代)

〔俳句界〕 12月号「注目の句集」に江見悦子主宰の「砂時計」が掲載された。

内容は次の通り。

自選5句、作者エッセイ、

柏原眠雨氏による鑑賞文、

中川雅雪谷口摩耶両氏による一句鑑賞

この中から、作者エッセイを紹介したい。

〔新しみ〕を旨指して

三十代で俳句を始めてから、「風」「万象」と、俳句を楽しみながら学んできました。

「風」の時代、沢木欣一と細見綾子お二人の晩年の弟子で居られたことは、大きな幸せでした。「風」が終刊し、新しく「万象」

の同人として参加して二十一年、昨年からは第四代主宰を務めています。

「万象」は創刊以来、沢木欣一の「風」

の基本理念である「即物具象の写生」を指

針とし、「詩」として魅力ある俳句」を追求

してきました。合言葉は「氣宇壮大」と「温

故知新」です。特に「知新」の「新しみ」

については、高齢化の問題を抜きにしては考えられず、難しい課題です。

ここで自身を振り返つてみても、常に悩ましいのは「季語」についてです。

沢木欣一は「即境俳句論」の中で、季語の存在について次のように述べています。

単に季節感のみを表すものではなく、日本人の何千年にわたる生活を基盤として結

晶したものであつて、生活意識・生活の認識・風土についての認識、それらに支えら

れての美意識、これらすべての歴史的集大成である。

一句を統べる季語の本意を歳時記で掘り

下げ、それを自分の句の中に取り入れ生か

していくこと、また季語と自分との新しい

関係を追求することが、「新しみ」へ続く

示唆の一つになると考えています。

「砂時計」を刊行し、沢山の方から励ま

しや共感をいただきました。またお会いし

たことのない方々からも、望外の鑑賞文や、

お褒めの言葉を頂戴しました。大きな喜び

であり、感謝に堪えません。

今後、皆様からの言葉を糧として進ん

で行きたいと願つています。

(報・編集部)

939-0364

射水市南太閤山 13
| 24

万象作品投句係行

84円切手を
貼ってください

〈通信欄〉

編集後記

▽1月の新中央句会の後に、年に2回の対面での編集会議を開きました。この「編集後記」でもお馴染みの編集部、神田美穂子さんは静岡から、更に今回は、北陸と関西以西の校正をお願いしている入山繁幸さんが、遠路はるばる大阪から上京してくださいました。コロナ禍の置き土産で、編集や校正もオンラインで行うようになりましたが、こうして顔を合わせて、現在抱える課題やこれからの「万象」誌について意見交換が出来たことはとても有意義なことでした。句会こそありませんでしたが、話は多岐におよび、楽しい時間になりました。(千久)

▽元旦早早の地震や二日の航空機事故。今年のお正月は悲惨な幕開けとなりました。「万象」の皆様のご無事と、一日も早い被災地の復興を願いつつ、今年の仕事始めの今、この原稿を書いております。自然の力の非情と、この世の無常を痛感しています。(規子)

▽年の初めの能登の震災、続く飛行機事故と令和6年が始まりました。石川、富山の皆様には心よりお見舞い申し上げます。今春、僚誌の「りのいの」「風港」が終刊になると聞き、これにも衝撃を受けています。(美穂子)

▽3月は忙しい。新年度に向けての準備と旧年度の仕上げが一度に来るから。考える前に体が動いている。しかし今年は違う。元日早早の能登の大地震。それから三ヶ月。本当の支援を始める時がやってきたと、ひしひしと感じる。それは取りも直さず、同じ日本列島に生きる明日の私たちの為でもある。心からそう思う。(宏子)

▽庭にある水仙がなぜか倒れている。根元から切り取りキッチンの窓際の花瓶に挿しておいた。すると、数日後に花が開き一週間以上楽しませてくれた。庭の水仙よりも、なぜか気になる窓際の水仙。切り取られた水仙の球根は来年も芽を出すのだろうかかと心配している。(清晴)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 002300・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 三月号

第二十二巻 第十二号

通巻 第二六四号

令和六年三月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一三-16-1603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

第二十二回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回、広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上・発展に資するものです。多数の応募を期待いたします。

作品 一人20句 未発表新作に限る

原稿用紙など一枚に縦書きとし、一通（コピー可）提出

原稿の冒頭に題名を、末尾に住所・姓号を明記

封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

メールでの応募の場合は、応募原稿と必要事項を添付してお送りください

選者

内海 良太 江見 悦子 小林 愛子 中村 千久 福島せいぎ

前田貴美子 榎本 文代 神田美穂子 林 陽子 三屋 英俊

応募資格

「万象」同人・会員に限る

締切

令和6年6月末日到着分までを有効とする

宛先

〒一六八〇〇〇七一 東京都杉並区高井戸西二一八〇一〇七

久留島規子（万象俳句賞事務局）

〈メール〉 norikokurushima@hotmail.com

☎〇八〇―一二九七―六一三

入賞発表

「万象」十月号 全国俳句大会で作品一席に万象俳句賞を贈る